



---

# 令和2～6年度漂着ごみ組成調査データ 分析の結果について

---

2026年3月  
環境省水・大気環境局海洋環境課  
海洋プラスチック汚染対策室



1. 調査表記データの概要(p2-6)
2. 漂着ごみ組成ランキングの変動の分析(相対量の変動分析)(p7-11)
3. 漂着ごみ量の変動分析(絶対量の変動分析)(p12-22)
4. 言語表記等調査の変動分析(p23-32)
5. 主な分析結果(p33)

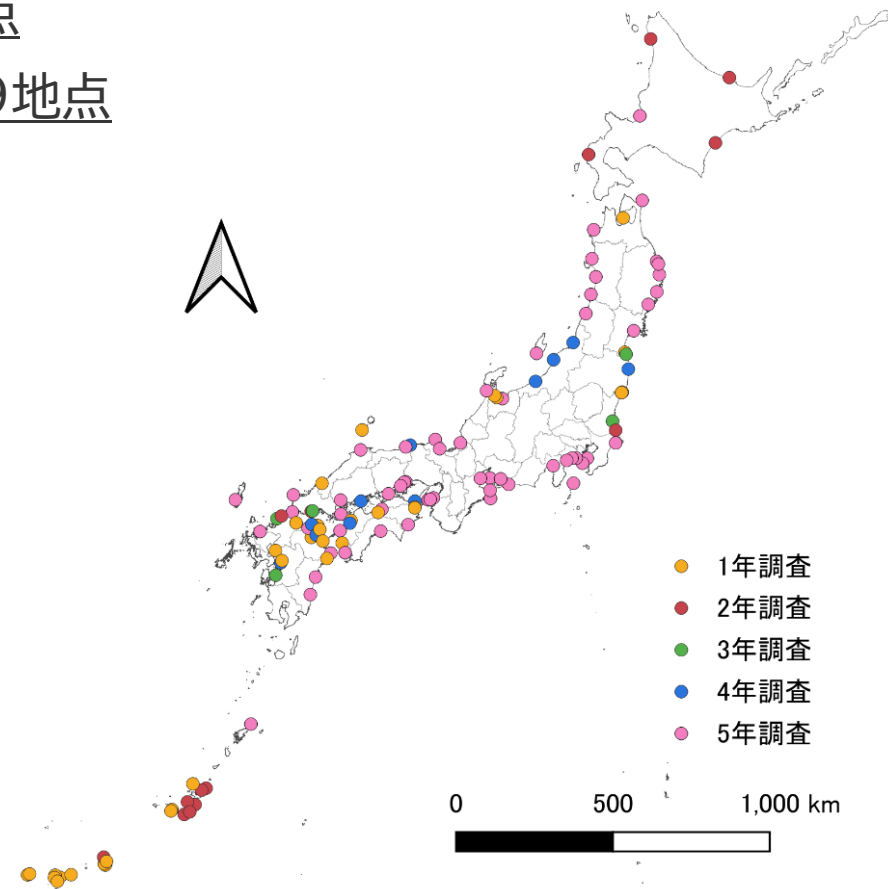
## 調査概要

- 各都道府県によりR2年度から、地方公共団体向け漂着ごみ組成調査ガイドライン※1に基づいた漂着ごみ組成調査が行われている
  - ※1 地方公共団体向け漂着ごみ組成調査ガイドライン(令和7年5月第4版)は以下のURLで公開されている  
<https://www.env.go.jp/content/000319000.pdf>
  - ※2 地方公共団体向け漂着ごみ組成調査ガイドラインを補完する資料として、「漂着ごみ組成調査に係るQ&A集」が公開されている[https://www.env.go.jp/water/marine\\_litter/post\\_118.html](https://www.env.go.jp/water/marine_litter/post_118.html)
  - ※3 調査精度確保のため、地方公共団体及び環境コンサルタント等の事業者向けに、ガイドラインの調査手法を解説する研修会を毎年開催している。今年度は、6月24日(座学研修)及び27日(フィールドワーク研修)に実施済み
- 本年度は、R6年度に実施された調査結果の取りまとめを行うとともに、R2～R6の結果について、経年的な増減傾向の分析を行う

## 調査地点

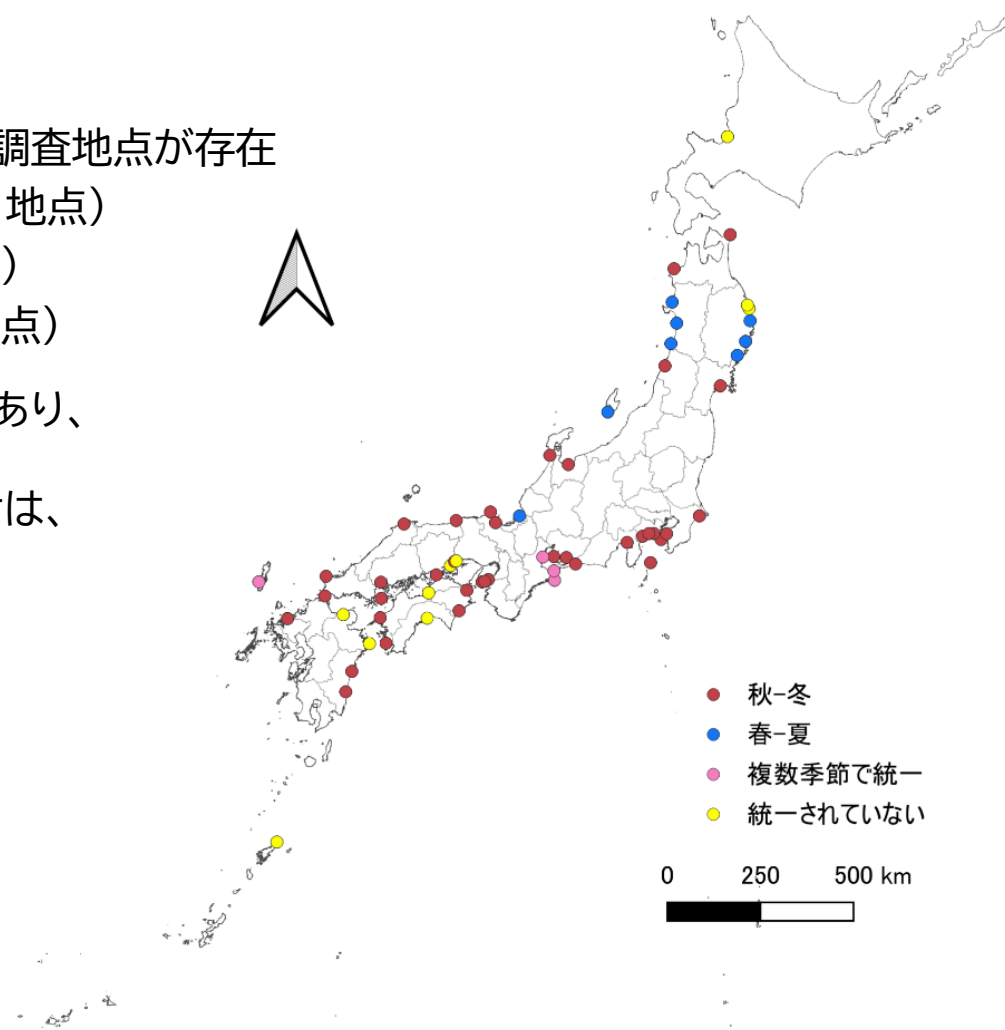
- 5年間で調査が行われた地点は計125地点
- うち、5年間継続的に調査された地点は59地点
- 調査地点は最も多い年で94地点(R2)、最も少ない年で76地点(R5)

年度	調査地点数
R2	94地点
R3	89地点
R4	78地点
R5	76地点
R6	80地点



## 継続調査地点

- 継続調査地点の調査時期は、秋～冬に統一されている地点が多い  
(4月～6月:春、7月～9月:夏、  
10月～12月:秋、1月～3月:冬)
- 以下の県は、2つの沿岸域区分(次ページ参照)に調査地点が存在
  - 山口県:瀬戸内海域(2地点)、対馬暖流上流域(1地点)
  - 徳島県:瀬戸内海域(1地点)、黒潮上流域(1地点)
  - 青森県:対馬暖流下流域(1地点)、親潮流域(1地点)
- 兵庫県は、瀬戸内海域(1地点)のみに調査地点があり、日本海側(対馬暖流上流域)の地点はない  
⇒3. 漂着ごみ量の変動分析 での兵庫県の色付けは、瀬戸内海のデータを示している。



## ※海流を考慮した沿岸域の区分

表 海流を考慮した沿岸域区分の境界

海流	沿岸域区分の境界
a 対馬暖流と黒潮	熊本県と鹿児島県の県境
b 黒潮と親潮	千葉県と茨城県の県境
c 対馬暖流と親潮(根室方面)	納紗布岬灯台
d 対馬暖流と親潮(津軽海峡方面)	(北海道側は)広尾町とえりも町の町境 (青森県側は)尻屋崎灯台
e 対馬暖流上流と対馬暖流下流	石川県と富山県の県境
f 黒潮上流と黒潮下流	和歌山県と三重県の県境

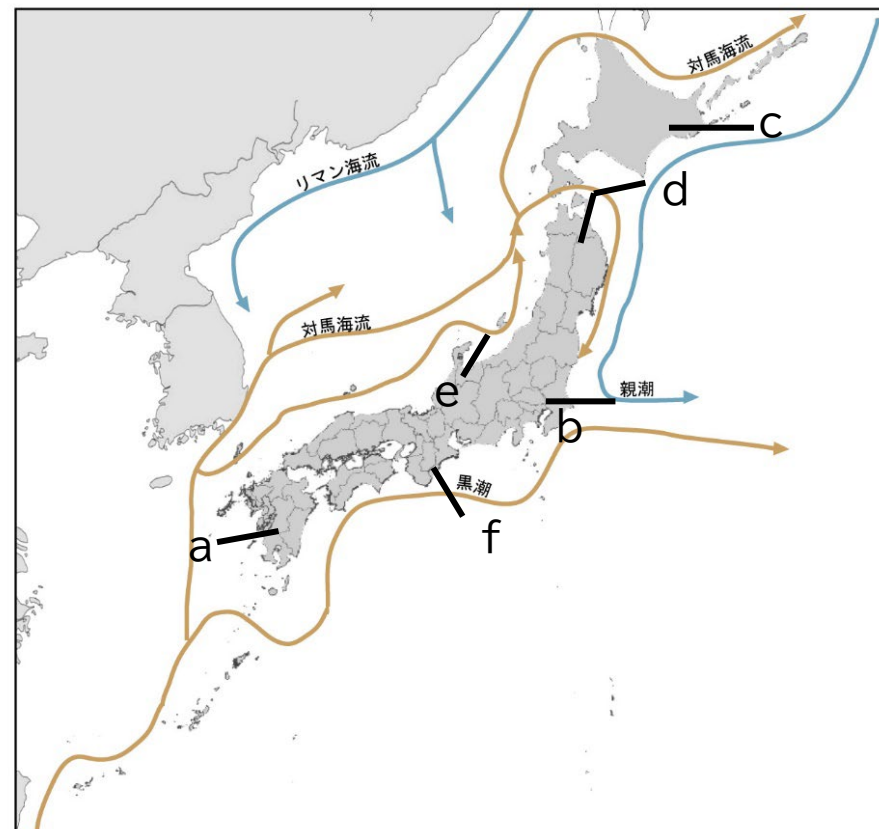


図 各沿岸域区分の境界

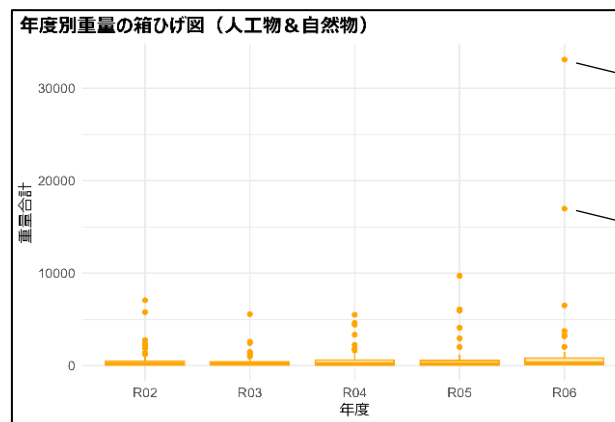
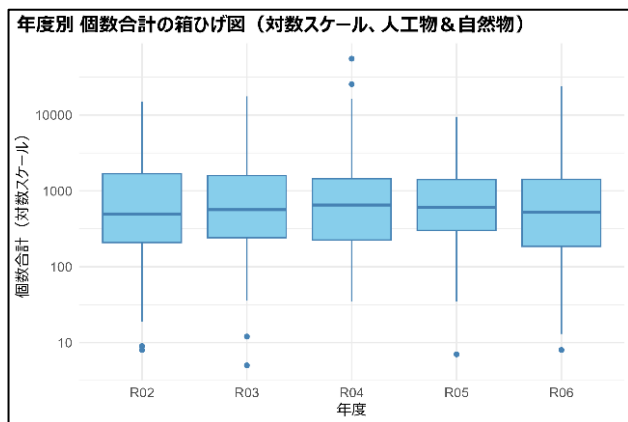
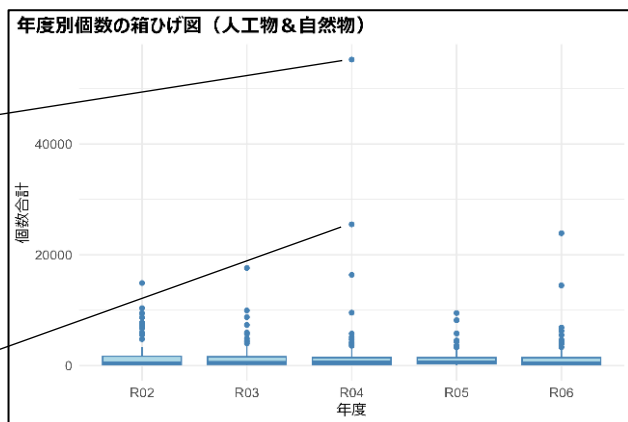
※瀬戸内海域の区分については、瀬戸内海環境保全特別措置法の対象区域に従う

## データの概要

- 今回は外れ値の除外等を行わずに分析
- なお、各年度の漂着ごみ量は正規分布に従っていない
- 5年間のうち、最も1調査当たりの回収個数が多かったのはR4の新潟県上越市直江津港西海岸であり、重量では青森県深浦町風合瀬海岸が最も多かった

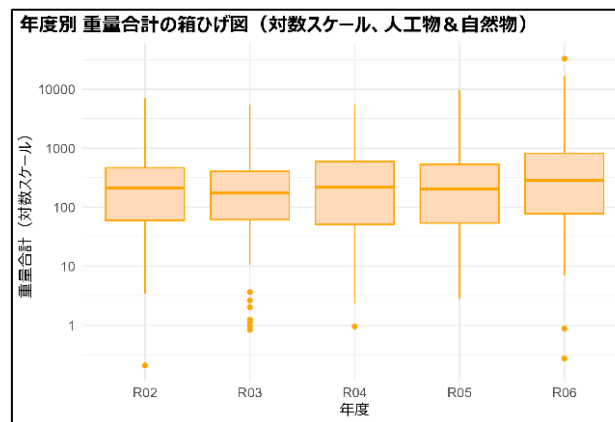
新潟県上越市  
直江津港西海  
岸 55,268個

沖縄県与那国  
島 ナーマ浜  
25,518個



青森県深浦町  
風合瀬海岸  
33,103 kg

新潟県胎内市  
荒井浜海岸  
16,971 kg



# 漂着ごみ組成ランキングの変動の分析（相対量の変動分析）

## 【目的】

- 漂着ごみの量は、海流や季節風等の影響により年によって変動する。
- そのため、各品目の相対的な増減傾向を確認することで、年変動の影響を軽減して各品目の増減を把握しやすくする。

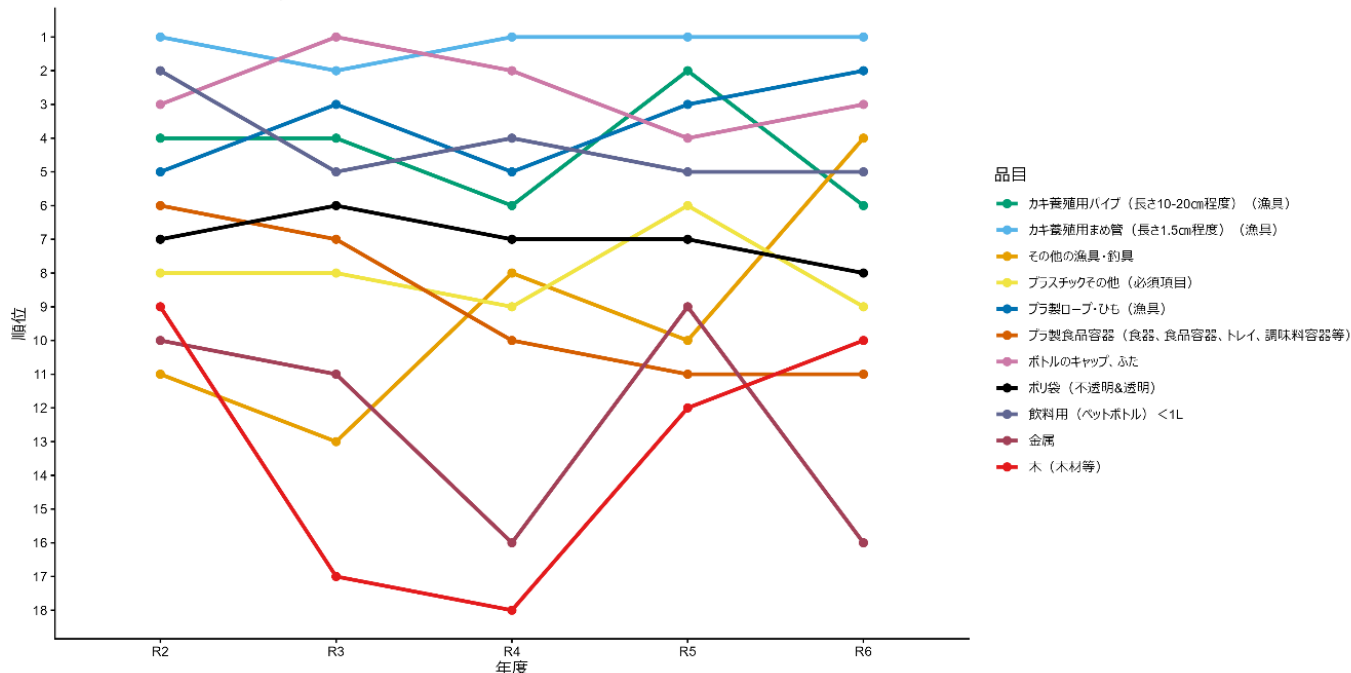
## 【方法】

1. 全国及び沿岸域区分別の回収個数・重量を年度・組成品目ごとに集計し、回収が多かった順に品目を並べたランキングを作成する。
2. それぞれ以下の品目を抽出し、年度を横軸、ランキングを縦軸とした折れ線グラフにて整理する。
  - ・全国：複数年度で10位以内にランキングした品目
  - ・各沿岸域区分：各沿岸域区分において、複数年度5位以内にランキングした品目

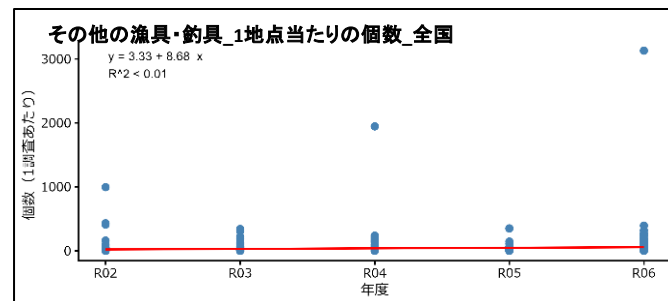
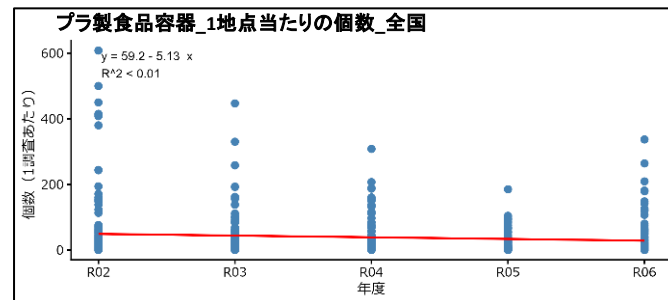
# 漂着ごみ組成ランキングの変動の分析（相対量の変動分析）

## 全国\_個数TOP10

【全国】複数年度で個数 Top10 入りした品目の順位推移



※人工物のみ  
 ※必須項目ベース(必須項目のみの調査地点が存在するため)  
 ※破片類は除く  
 ※各品目で全国の調査結果を合計したランキング  
 ※年度により調査地点が異なる場合がある

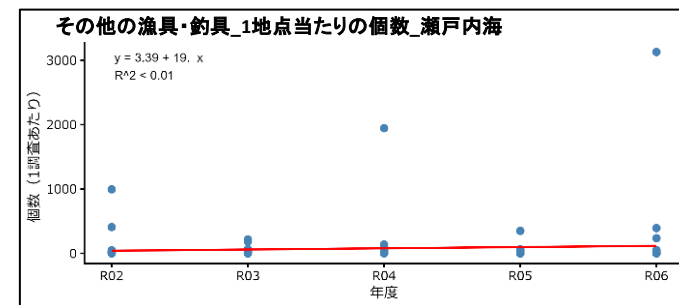
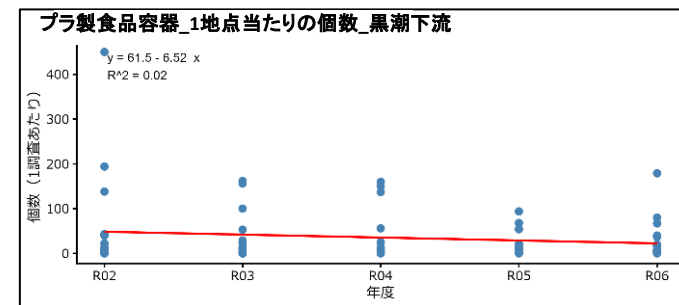
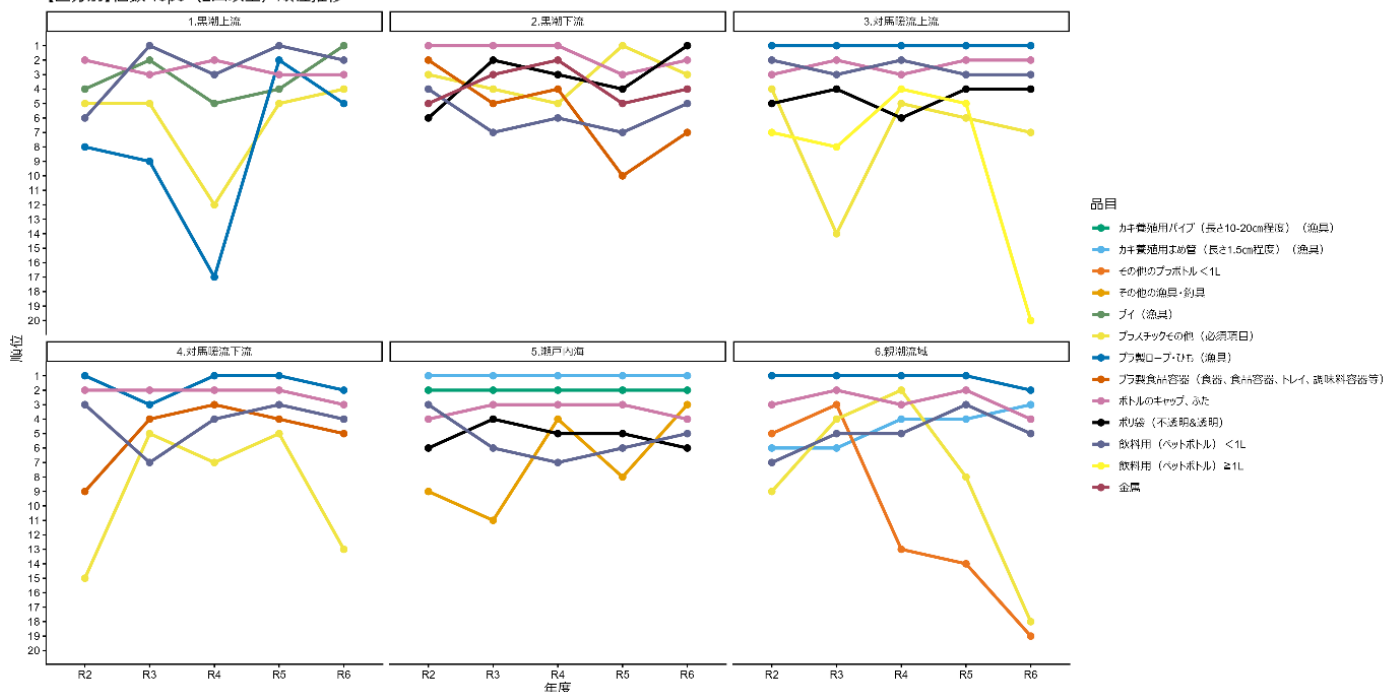


- 上位5位以内の品目(カキ養殖用まめ管、カキ養殖用パイプ、ボトルのキャップ、ふた、飲料用ペットボトル<1L、ロープ・ひも(漁具))については大きな順位変動は無く、全国的に継続して相対量が多かった。
- 「プラ製食品容器」と「その他の漁具・釣具」と「金属」では、R2とR6で5位以上の大きな順位差が確認された。
- 「プラ製食品容器」はR2に6位だったのに対しR6には11位と順位が5位減少した。  
 「プラ製食品容器」の1調査あたりの個数には減少傾向が見られた(右上図、統計的な有意性無し)
- 「その他の漁具・釣具」はR2に11位だったのに対し、R6には4位と順位が7位増加した。  
 「その他の漁具・釣具」の1調査あたりの個数には増加傾向が見られた(右下図、統計的な有意性無し)

# 漂着ごみ組成ランキングの変動の分析（相対量の変動分析）

## 沿岸域区分別\_個数TOP5

【区分別】個数 Top5 (2回以上) 順位推移

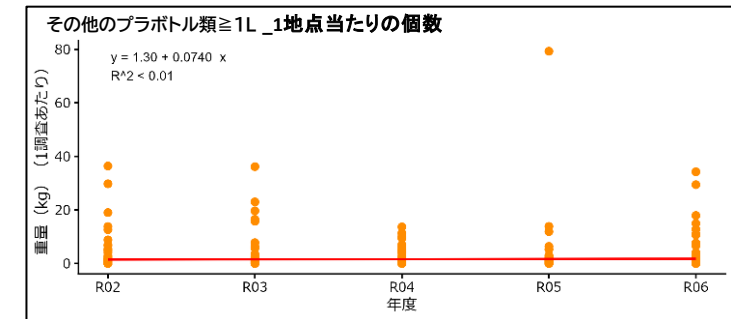
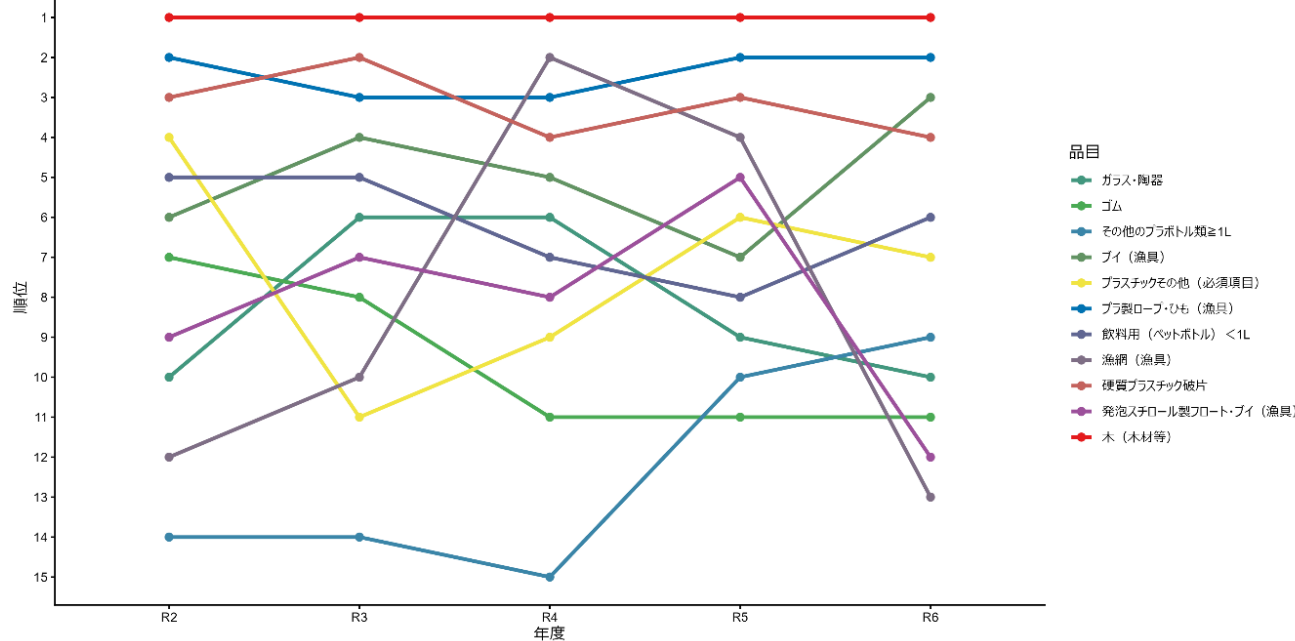


※人工物のみ  
 ※必須項目ベース(必須項目のみの調査地点が存在するため)  
 ※破片類は除く  
 ※年度により調査地点が異なる場合がある

- 「プラスチック容器」は黒潮下流と対馬暖流下流の2区分でのみ表れている。特に黒潮下流ではR2の2位からR6の7位まで減少しており、1調査当たりの回収個数も減少傾向が見られた(右上図、統計的な有意性は無し)
- 「その他の漁具・釣具」は瀬戸内海でのみ上位にランキングしており、1調査当たりの回収個数は増加傾向が見られた(右下図、統計的な有意性は無し) 瀬戸内海のその他の漁具・釣具をオプション項目別、地点別に確認すると、オプション項目の中でも「その他の漁具・釣具」が広島県、大分県、山口県にて1回の調査で数百～数千個回収された実績があり、本品目の増減に影響を与えていることが考えられる。一方で、オプション項目の「その他の漁具・釣具」はそれ以上詳細な品目を確認することができないため、実際にどのようなものが増加しているか特定が不可能であった。

## 全国\_重量TOP10

【全国】複数年度で重量 Top10 入りした品目の順位推移

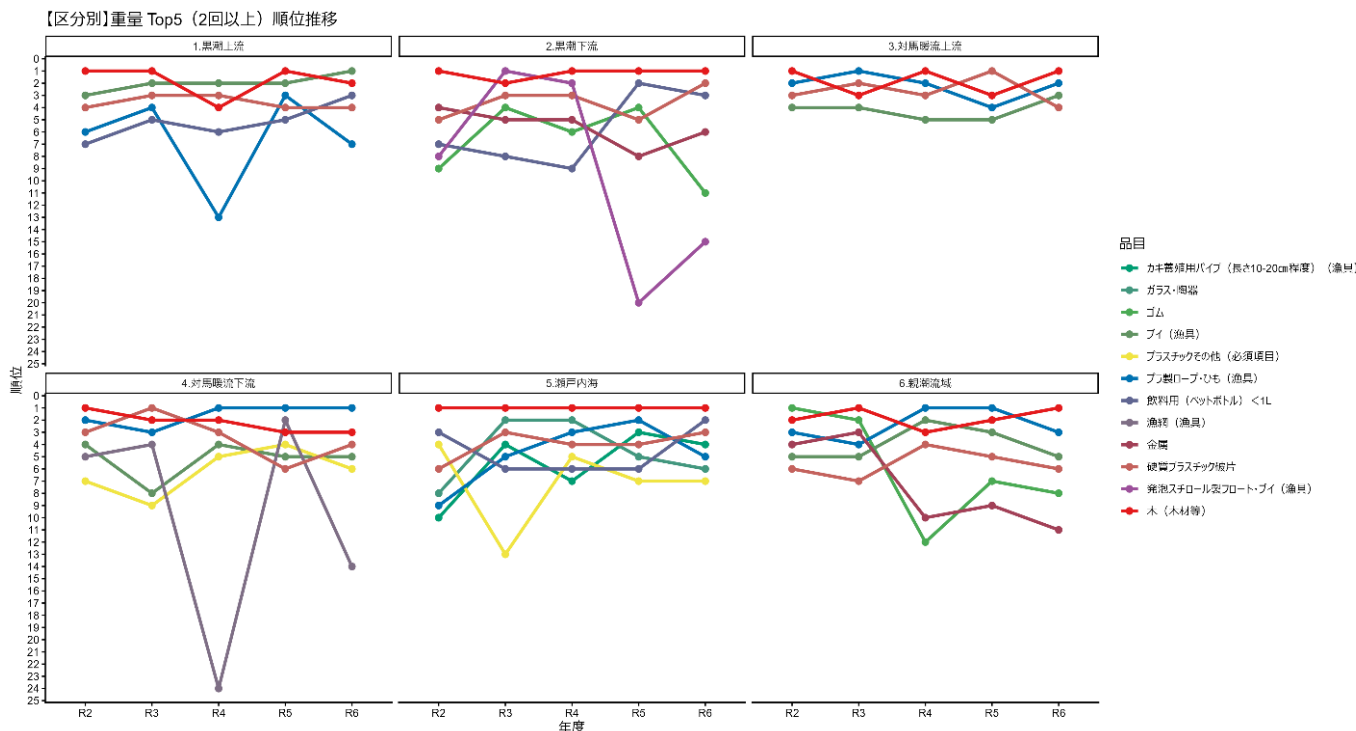


※人工物のみ  
 ※必須項目ベース(必須項目のみの調査地点が存在するため)  
 ※各品目で全国の調査結果を合計したランキング  
 ※年度により調査地点が異なる場合がある

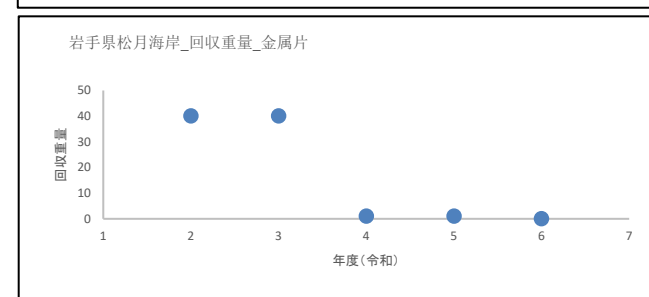
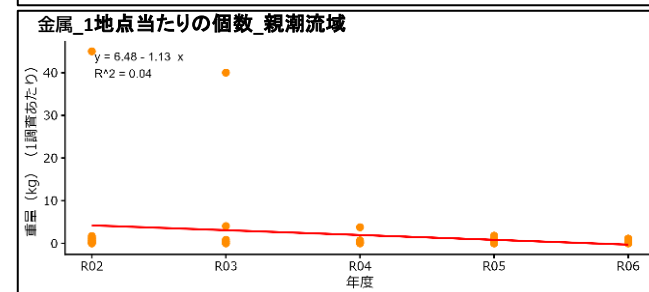
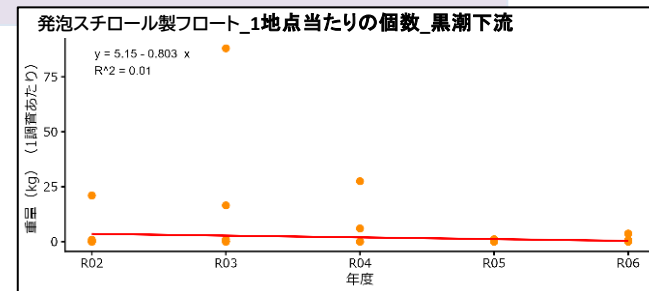
- R2とR6で5位以上大きな順位の違いがある品目は「その他のプラボトル類≧1L」のみであり、14位から9位に増加した
- 「その他のプラボトル類≧1L」について1地点当たりの重量を確認すると、増加傾向が見られた(右図、統計的な有意性は無し)

# 漂着ごみ組成ランキングの変動の分析（相対量の変動分析）

## 重量TOP10(人工物のみ)



※人工物のみ  
 ※必須項目ベース(必須項目のみの調査地点が存在するため)  
 ※各品目で全国の調査結果を合計したランキング  
 ※年度により調査地点が異なる場合がある



- 発泡スチロール製フロートは黒潮下流でのみ出現しており、R2の8位からR6の15位まで順位が変動した。回収重量を確認すると、1地点当たりの重量は減少傾向が見られた(右上図、統計的な有意性無し)
- 親潮流域では、金属及びガラス・陶器について5位以上の大きな順位の減少が見られており、絶対量も減少していた(右中央図)。オプション項目別・地点別に確認すると、金属は「金属片」が岩手県の松月海岸にてR2・3年度に40kgと他の地点・年度と比較して多く、これが沿岸区域別のランキングに影響を与えていることが考えられる(右下図)。ただし、「金属片」とは金属製品のうち元の製品が分からなかった場合に分類しているため、詳細は不明。

# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 【目的】

- 全国・沿岸域区分・都道府県ごとに、漂着ごみの総量が増加/減少しているか確認する。
- また、品目ごとの増減を確認することで、ランキングの変動には表れないような増減傾向を確認する。

## 【方法】

### ①全品目統合

1. 1地点・1調査当たりの回収個数・重量を集計する。
2. 全国及び沿岸域区分別に、1地点・1調査当たりの個数と重量の経年変化図を作成し、回帰直線の傾きから増減傾向を判断する。
3. 加えて、継続調査地点に限り、都道府県別に、1地点・1調査当たりの個数と重量の経年変化図を作成し、回帰直線の傾きを算出する。これを都道府県別の1地点・1調査当たりの平均値で除すことで、傾きの割合を算出し図示\*する。

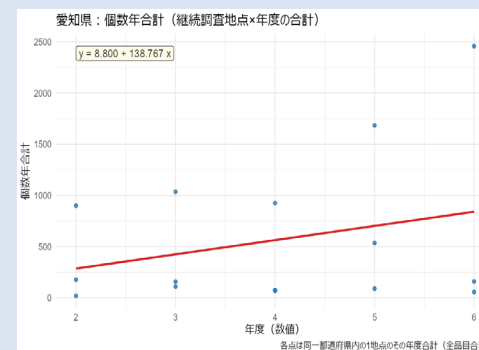
### ②品目ごと

1. 組成ランキングにおいて、5年間継続的に上位にランキングしていた以下の5品目について、5年間継続的に調査が実施された地点に絞り、都道府県ごとの増減傾向を判断した。

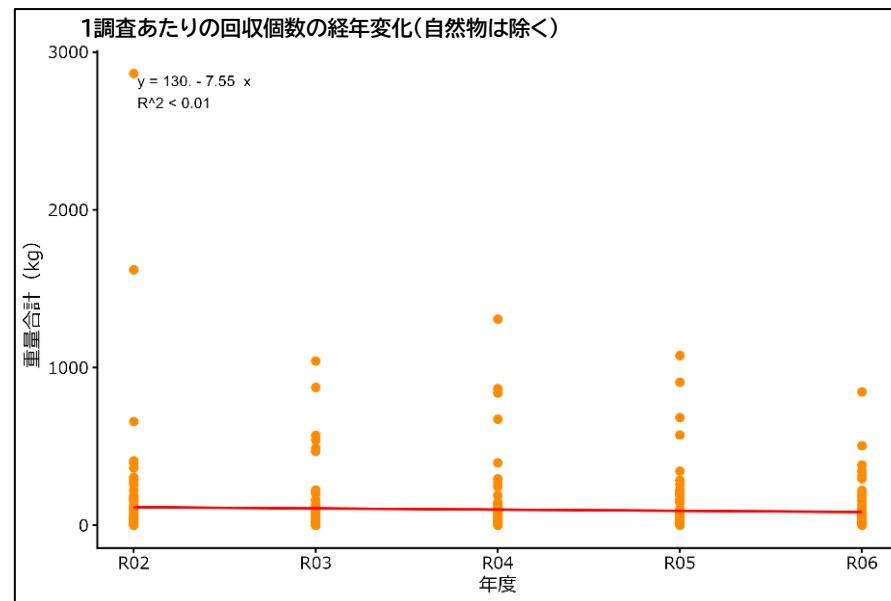
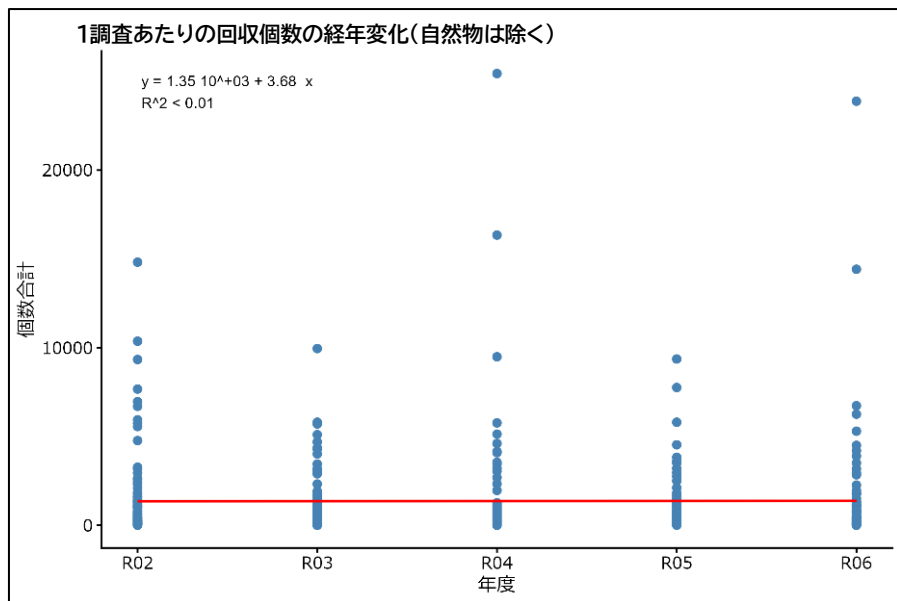
- カキ養殖用まめ管
- カキ養殖用パイプ
- ボトルのキャップ・ふた
- 飲料用ペットボトル<1L
- ロープ、ひも(漁具)

### ※都道府県別増減割合の算出方法(例:愛知県)

- ① 1点を1地点・1調査とした散布図を作成(下左図)
- ② 回帰直線の傾きを算出(愛知県: +138.767)
- ③ 各都道府県の1調査における平均回収個数を算出(愛知県: 563個)
- ④ ②/③により増減割合を算出(愛知県: ②/③ = +0.24であり、24%増加している傾向)
- ⑤ 都道府県ごとに①~④を実施し、全国マップとして取りまとめ(下右図)



## 全国の増減傾向



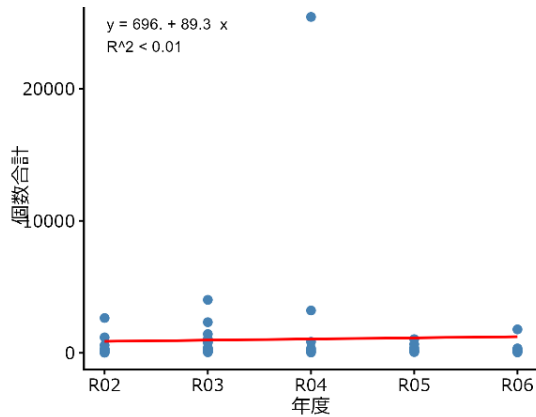
- ※1点は1地点・1調査における回収個数/重量を示す
- ※個数は破片類は除く
- ※年度により調査地点は異なる
- ※人工物のみの結果を示す

- 個数では増加傾向、重量では減少傾向が見られた(いずれも統計的有意性なし)
- 全国を統合した結果では、沿岸域区分や地点の影響が相殺され、増減傾向が表れづらい可能性がある

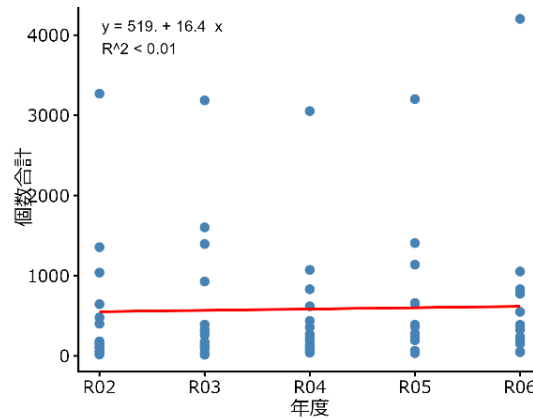
# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 沿岸域区分別の増減傾向\_個数、自然物除外

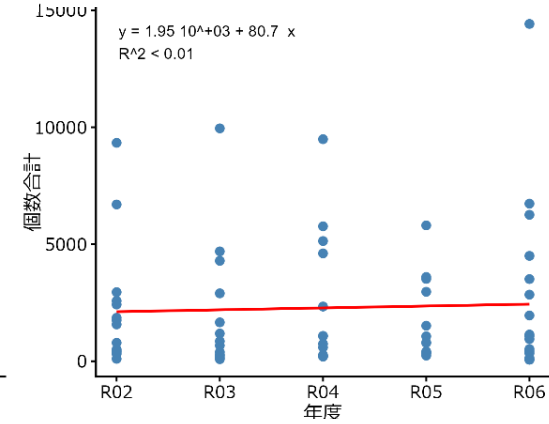
1. 黒潮上流(自然物は除く)



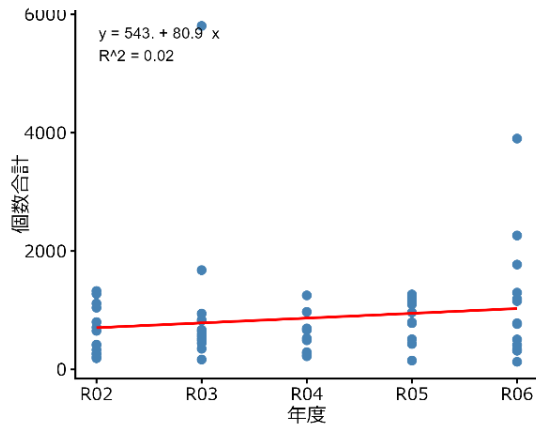
2. 黒潮下流(自然物は除く)



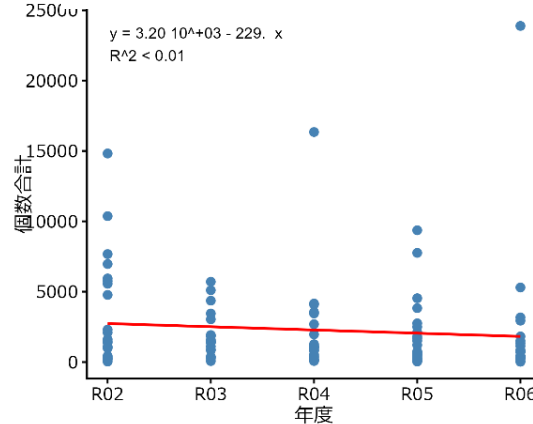
3. 黒潮上流(自然物は除く)



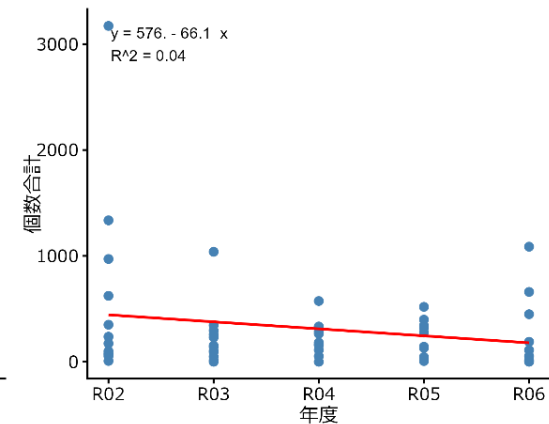
4. 黒潮上流(自然物は除く)



5. 黒潮上流(自然物は除く)



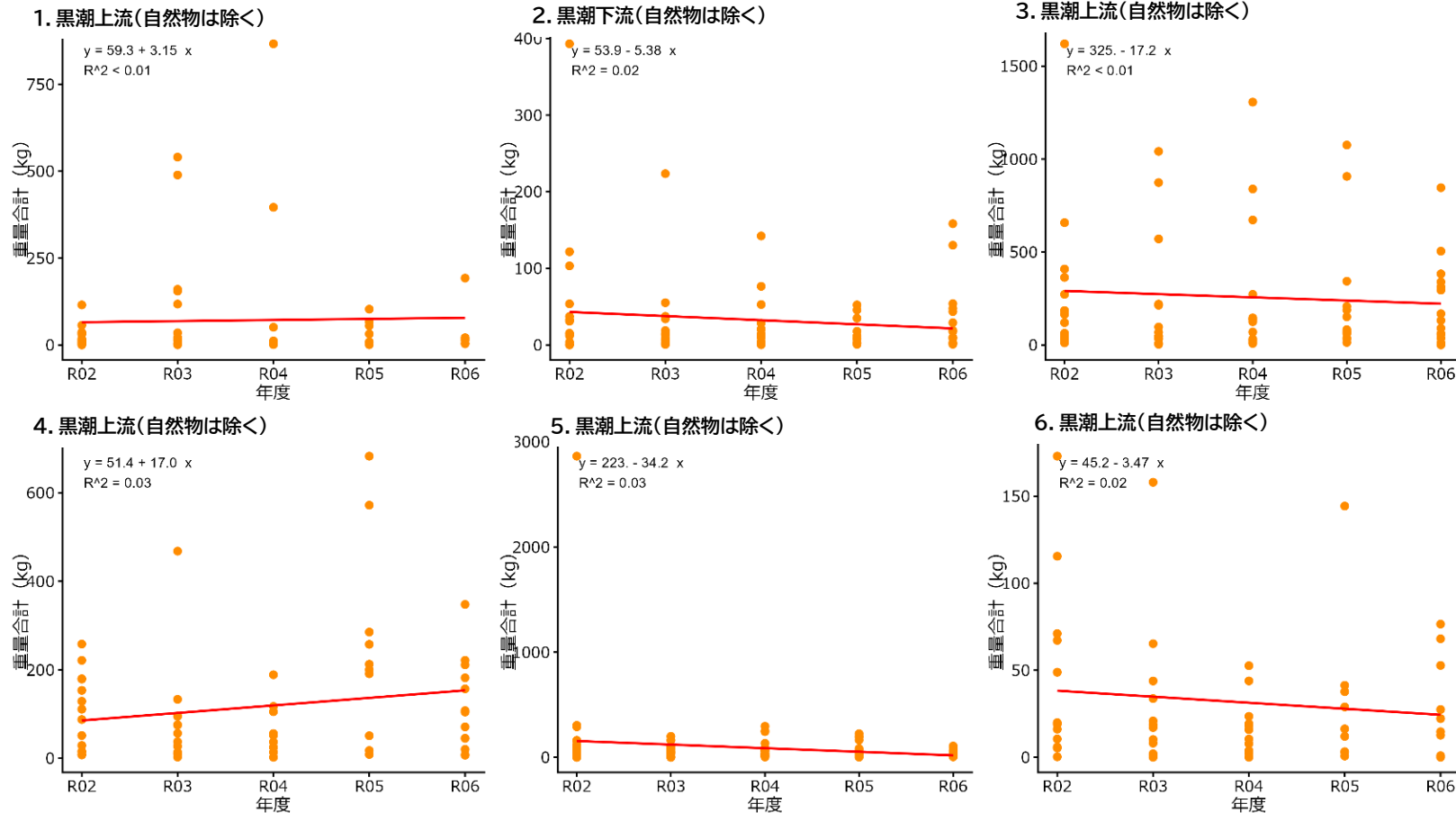
6. 黒潮上流(自然物は除く)



※1点は1地点・1調査における回収個数を示す  
 ※破片類は除く  
 ※年度により調査地点は異なる  
 ※人工物のみの結果を示している

- 瀬戸内海及び親潮流域では減少傾向が確認された(いずれも統計的な有意性は無し)
- 都道府県ごと等、より細かい単位で増減傾向を確認することで、地域ごとの特徴をより詳細に把握できる可能性がある

## 沿岸域区分別の増減傾向\_重量、自然物除外



※1点は1地点・1調査における回収重量を示す  
 ※年度により調査地点は異なる  
 ※自然物のみ結果を示している

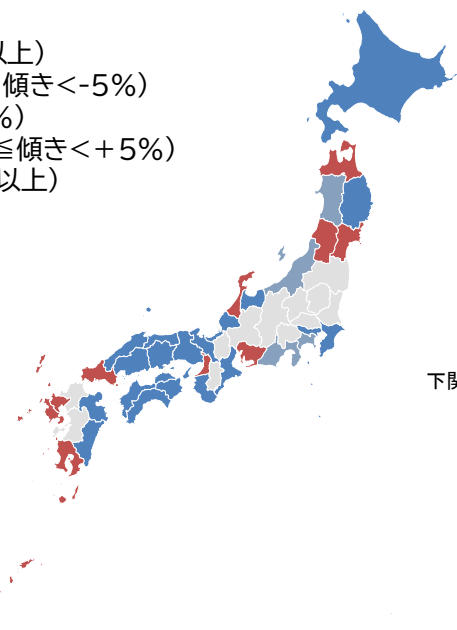
- 黒潮上流及び対馬暖流下流では増加傾向、その他の区分では減少傾向(いずれも統計的な有意性は無し)
- 都道府県ごと等、より細かい単位で増減傾向を確認することで、地域ごとの特徴をより詳細に把握できる可能性がある

# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 都道府県別、全品目※継続調査地点のみ

個数の増減割合

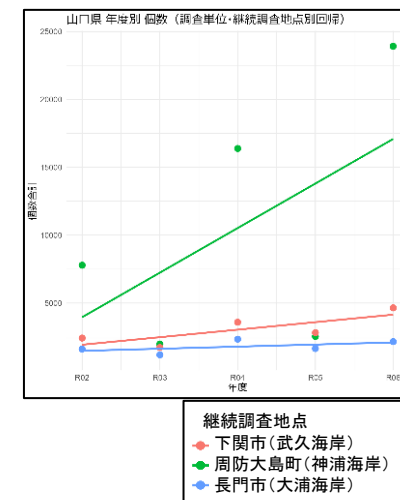
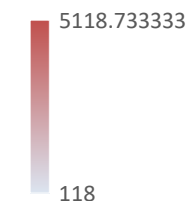
- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



5年間の個数平均値



平均個数\_1調査



提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。

※破片類は除く

※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

- 対馬暖流上流域のうち、島根県から福井県にかけては連続した減少傾向が見られた。
- 瀬戸内海域では、山口県、大阪府を除き減少傾向が見られた。
- 1調査当たりの平均個数が最も多かったのは山口県であった。山口県には継続調査地点が3地点あり、3地点中2地点では令和6年度の回収個数が最も多い。  
特に周防大島町(神浦海岸)のR6回収個数は23,912個(うち18,200個がカキ養殖用まめ管)と、継続調査地点の中で1回の調査での回収個数が最も多かった。

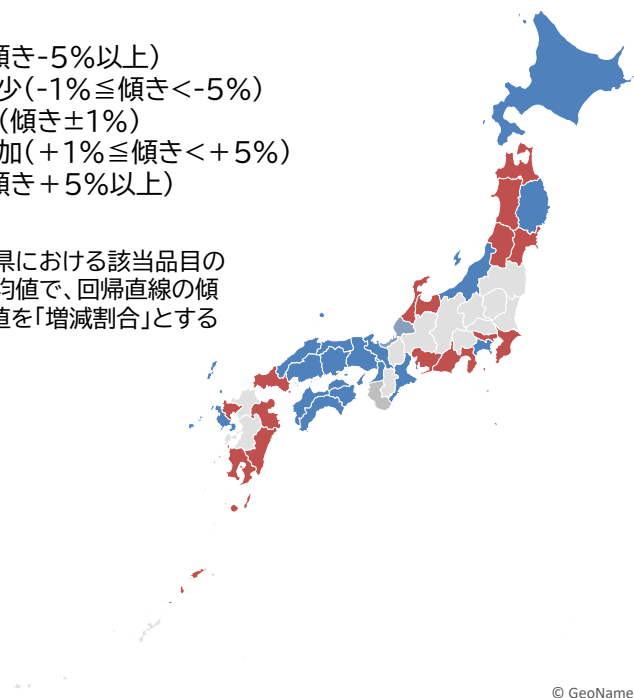
# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 都道府県別、全品目※継続調査地点のみ

重量の増減割合

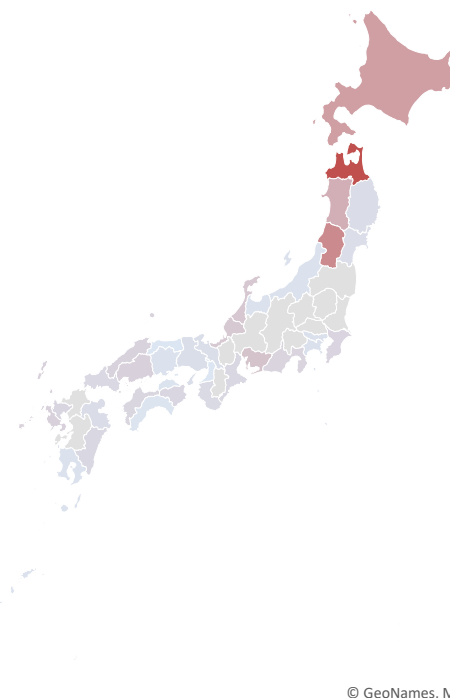
- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)

※各都道府県における該当品目の回収重量平均値で、回帰直線の傾きを除した値を「増減割合」とする



提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

5年間の重量平均



平均重量\_1調査  
3948.816962  
10.0914

提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。

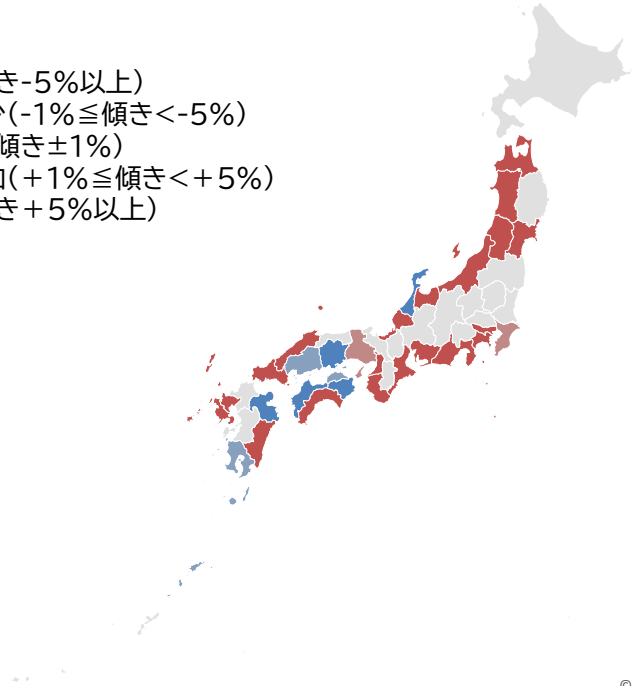
※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

- 対馬暖流上流域では、佐賀県・山口県・石川県を除き連続した増加傾向が確認された(山口県の調査地点のうち、対馬暖流上流域の地点は増加傾向)。
- 瀬戸内海域では、山口県、大分県を除き減少傾向が見られた(山口県の地点のうち、瀬戸内海域の地点は1地点増加、1地点は減少傾向)
- 5年間の1地点当たりの平均個数が最も多かったのは青森県であり、親潮流域と対馬暖流下流域に1地点ずつ継続調査地点が存在するが、どちらの地点も増加傾向が見られた。  
青森県の継続調査地点は2地点だが、両地点とも令和6年の流木の回収重量が非常に大きかったため、平均重量に影響を与えている。

## 品目別\_カキ養殖用まめ管※継続調査地点のみ

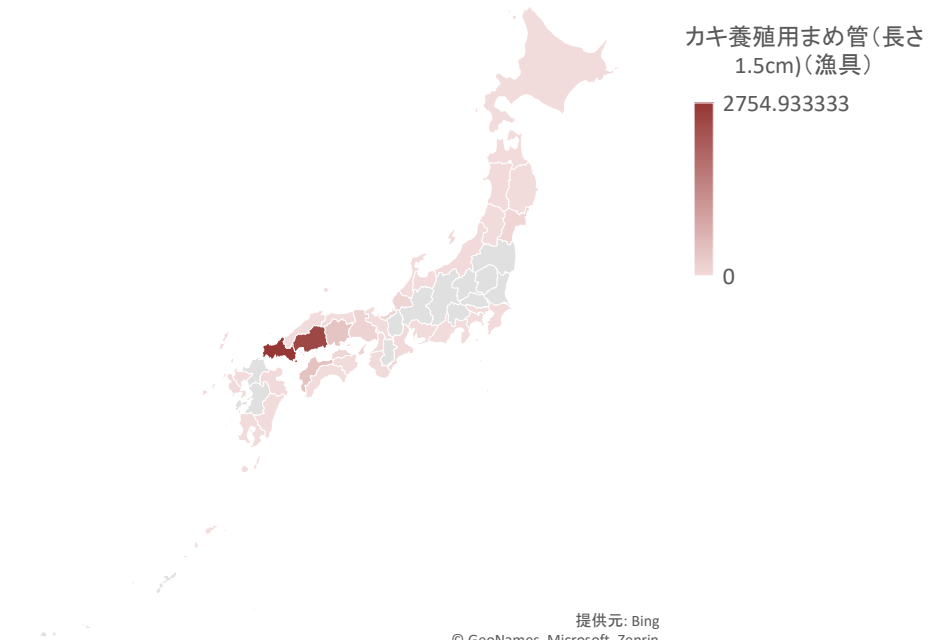
カキ養殖用まめ管の増減割合（継続調査地点）

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

カキ養殖用まめ管1地点当たりの平均個数（継続調査地点）



提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。

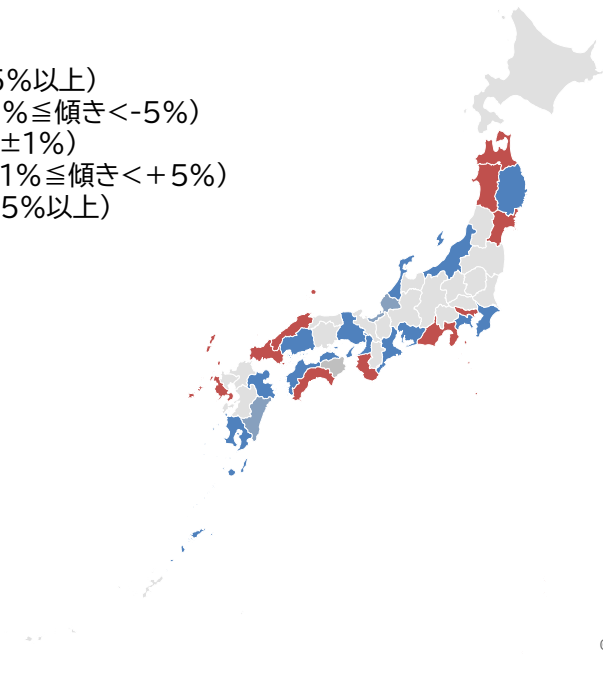
※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

- 瀬戸内海域では山口県、兵庫県、大阪府、和歌山県では増加傾向がみられ、徳島県でも瀬戸内海域の地点は増加傾向となった。一方で、同じ沿岸域区分でも減少傾向の都道府県も複数確認された。
- 1地点当たりの平均個数が最も多かったのは山口県で約2,755個、次いで広島県の約2,476個であった。
- しかし、広島では減少傾向である一方で、山口では増加傾向が確認された。
- 山口ではR6に周防大島町(神浦海岸)で18,200個が回収されており、これは継続調査地点での1調査あたりの回収個数として最多である。

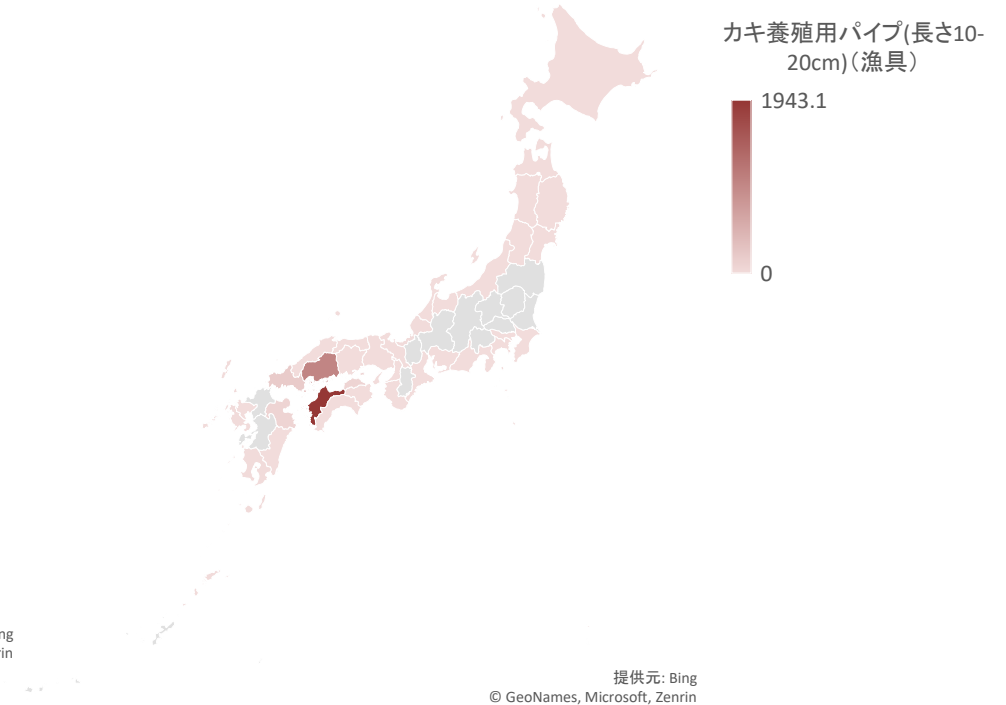
## 品目別\_カキ養殖用パイプ※継続調査地点のみ

カキ養殖用パイプ(継続調査地点)

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



カキ養殖用パイプ1地点当たりの平均個数(継続調査地点)



※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。  
 ※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

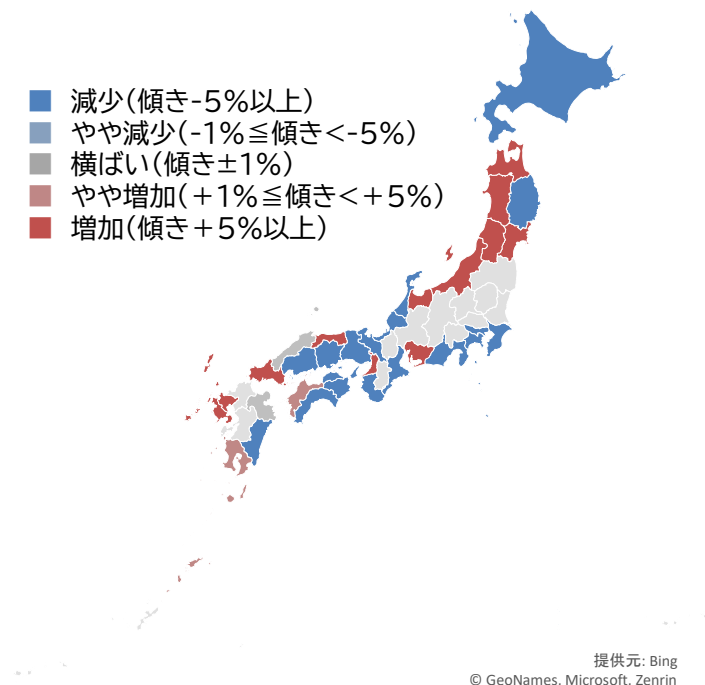
- 瀬戸内海域では、山口県、和歌山県では増加傾向が見られ、その他の都道府県では減少傾向が確認された(山口県の調査地点では、瀬戸内海域、対馬暖流上流域のいずれの調査地点でも増加傾向)
- 1地点当たりの平均個数が最も多かったのは愛媛県で約1,943個であった。
- 愛媛県の継続調査地点は2か所(伊方町、愛南町)であり、伊方町では最も回収個数が多かったのは令和5年の5,632個、愛南町では令和3年の2,148個である。しかし愛南町ではR5は309個、R6に519個であり、年変動が大きいことが示唆される。

# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

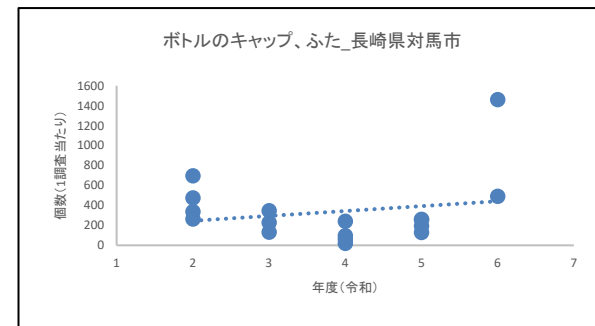
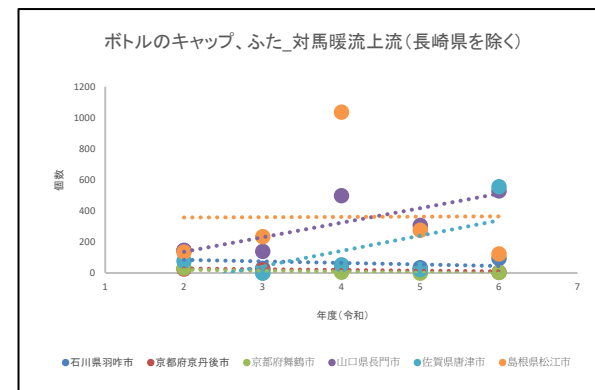
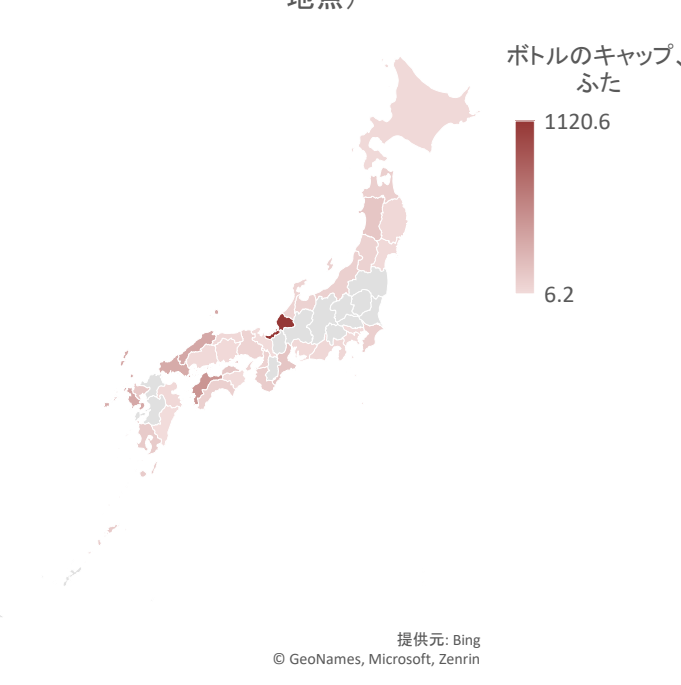
## 品目別\_ボトルのキャップ、ふた※継続調査地点のみ

ボトルのキャップ、ふた（継続調査地点）

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



ボトルのキャップ、ふた1地点当たりの平均個数（継続調査地点）



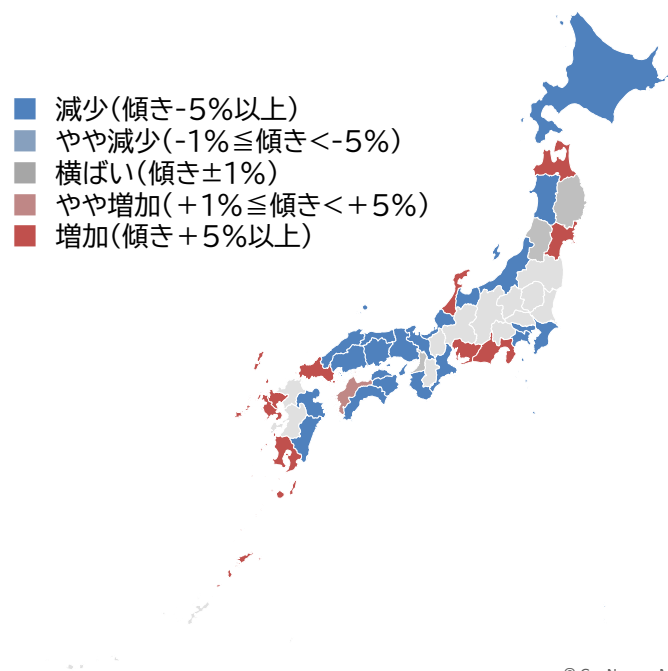
※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。  
 ※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

- 対馬暖流下流では、北海道を除き増加傾向が見られた(青森県では、対馬暖流下流の地点は増加、親潮流域の地点は減少)
- 1地点当たりの平均個数が最も多かったのは福井県で、約1,121個
- 福井県の継続調査地点は1地点のみで、R2は100個の回収だったが、R3に2,746個回収され、その後は1,100個、964個、693個と減少傾向にある。
- なお、同じ沿岸域区分の他の都道府県においては、R3に急増する傾向はみられず、例えば島根県ではR4に急増する等、年変動が大きいものと考えられる

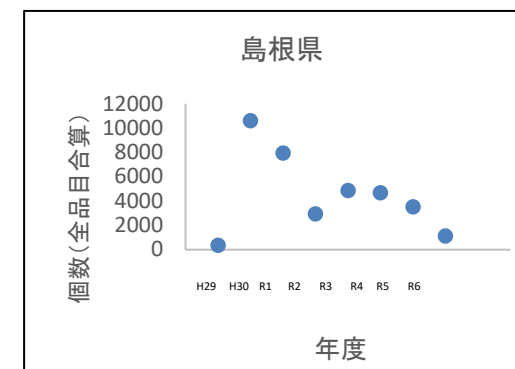
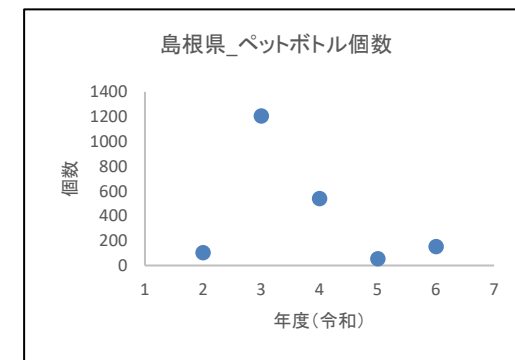
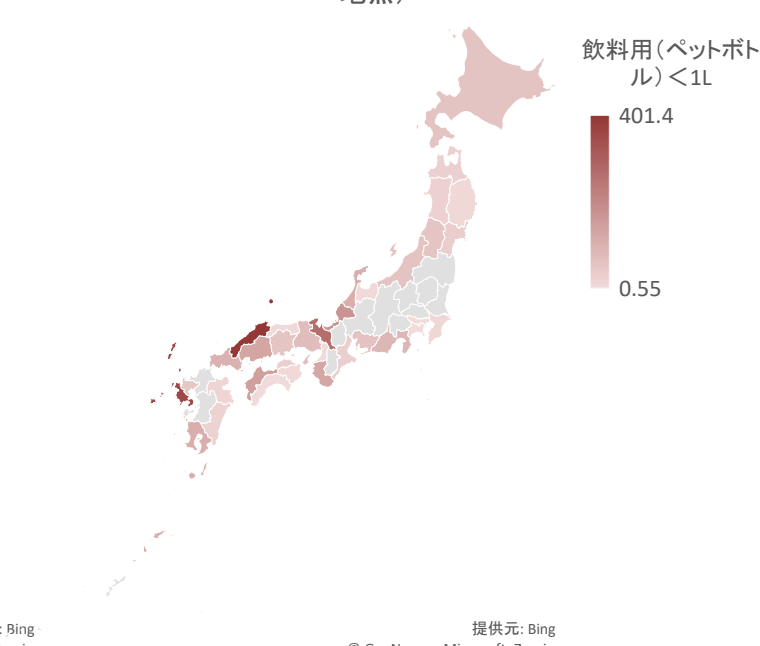
# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 品目別\_ペットボトル<1L ※継続調査地点のみ

飲料用(ペットボトル)<1L(継続調査地点)



飲料用(ペットボトル)<1L 1地点当たりの平均個数(継続調査地点)



※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。

※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

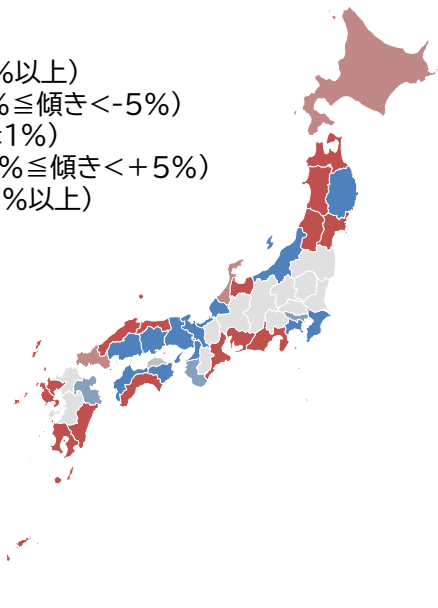
- 全国的に減少傾向の都道府県が多く、増加傾向の都道府県は10件のみである。特に、対馬暖流上流のうち島根県から福井県にかけては減少傾向が一致していた。
- 1地点当たりの平均個数が最も多かったのは島根県で約401個であった。
- 島根県の継続調査地点は1地点で、R2は102個のみの回収だったが、R3に1,205個と個数が増加した。なお、R3の調査前に出水や清掃等は無く、秋～冬の調査で統一されている。
- 島根県の回収個数全体の増減傾向をH29～R1の調査も含めて確認すると、H30に非常に回収個数が多いことから、年変動が非常に大きいことが示唆される。

# 漂着ごみ量の変動分析（絶対量の変動分析）

## 品目別\_ロープ、ひも※継続調査地点のみ

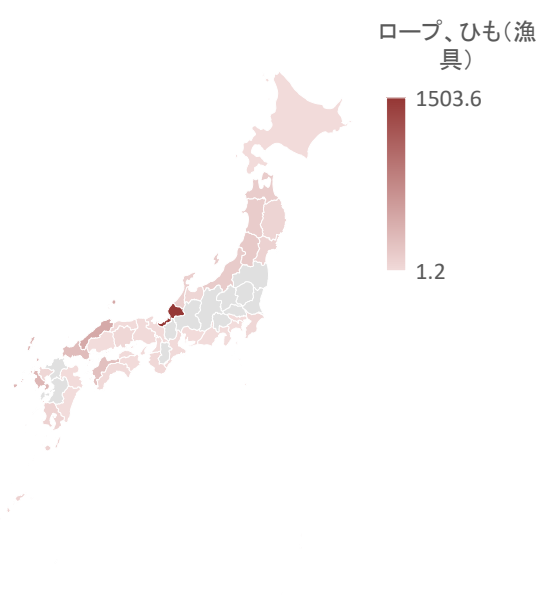
ロープ、ひも(漁具) (継続調査地点)

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)

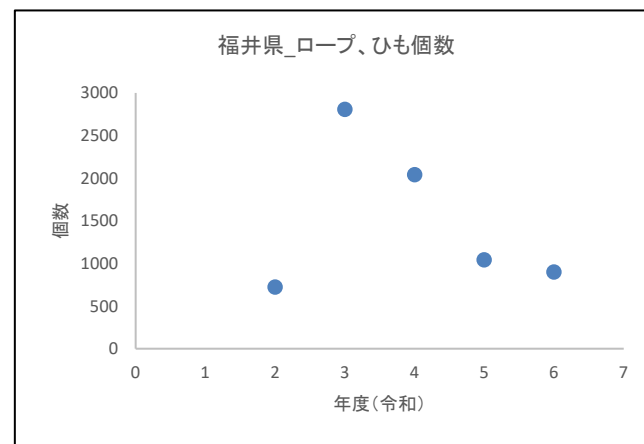


提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

ロープ、ひも1地点当たりの平均個数(継続調査地点)



提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin



※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数」を散布図にし、その回帰直線の傾きを、当該都道府県の回収個数の平均値で割ったものを、回収個数の増減割合として示す。

※令和2年から6年まで継続的に同じ地点で調査された地点のみ分析対象としている

- 対馬暖流下流では、新潟県を除き増加傾向が見られた(青森県では、対馬暖流下流の地点は増加、親潮流域の地点では減少)。
- 1地点当たりの平均個数が最も多かったのは福井県で約1,504個であった。
- 福井県の継続調査地点は1地点で、R2は723個のみの回収だったが、R3に2,808個と個数が増加した。なお、調査時期は春(4月～6月)で統一されている。

# 言語表記等調査の変動分析

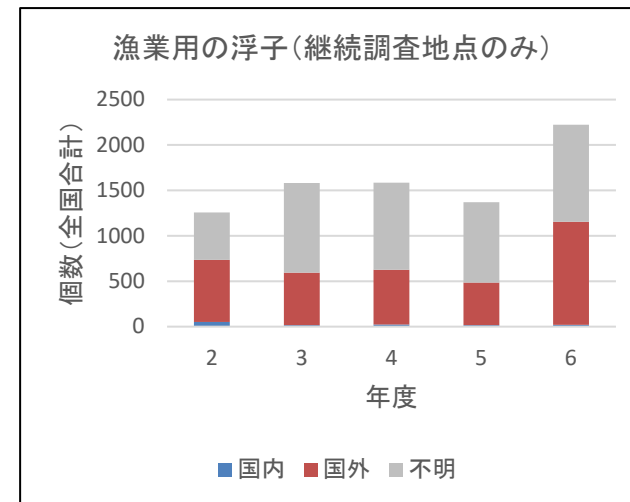
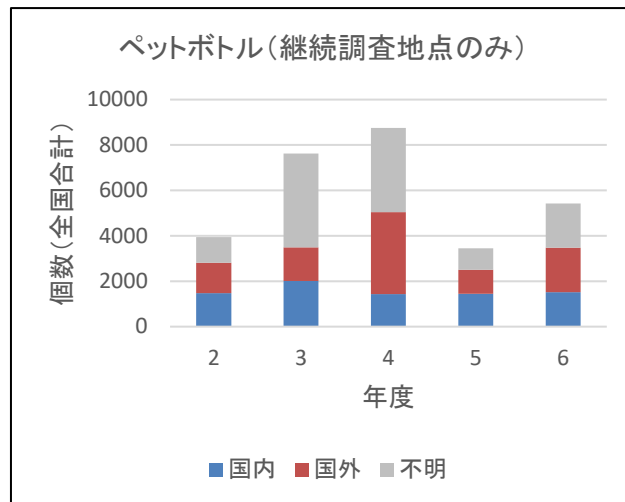
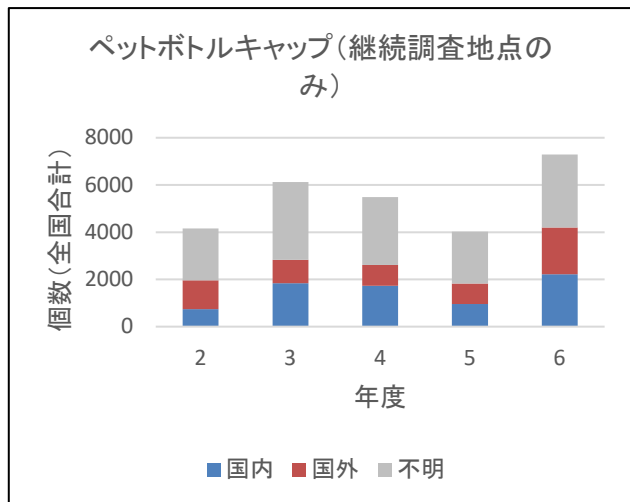
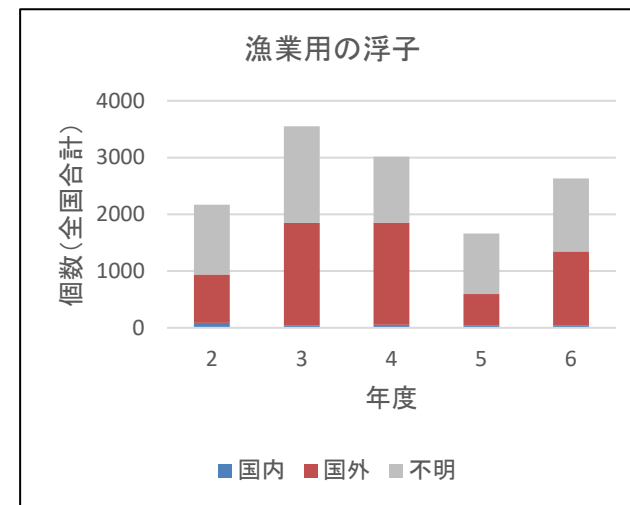
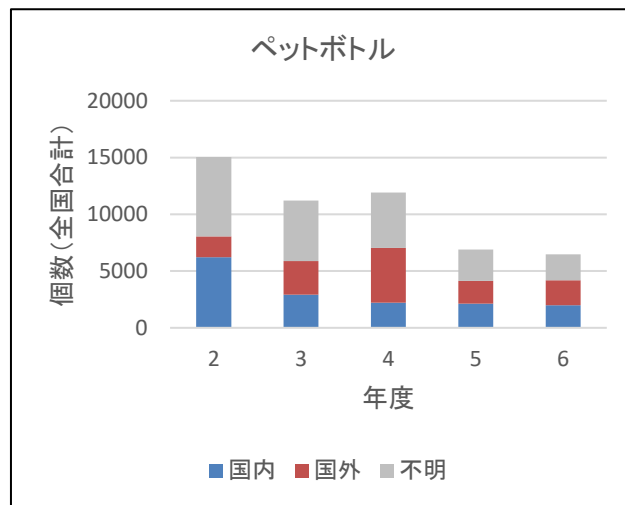
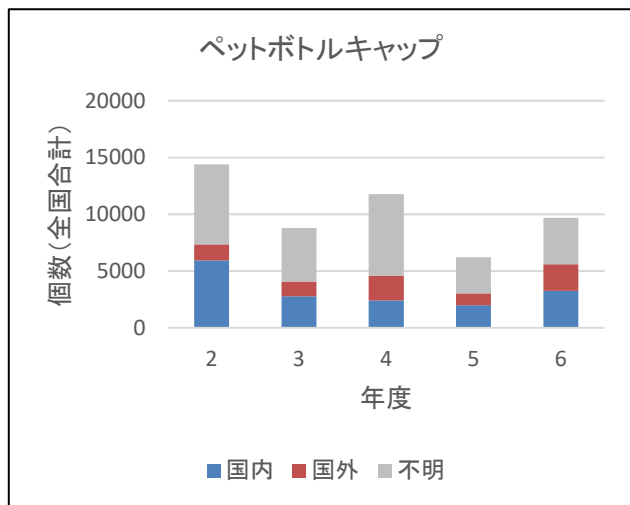
## 【目的】

- ペットボトルのキャップ、ペットボトル、漁業用の浮子の3品目については、言語表記等の調査を行っている
- 日本語表記及び外国語表記の割合や数を分析することで、どの場所でどの国の漂着物が増加/減少しているか把握することができる

## 【分析方法】

1. 全国・沿岸域区分別・都道府県別に、品目別の国内・国外表記の回収個数を集計
  2. 国内・国外の回収個数、割合を散布図により可視化
- ※なお、言語不明のものは上記の集計より除外

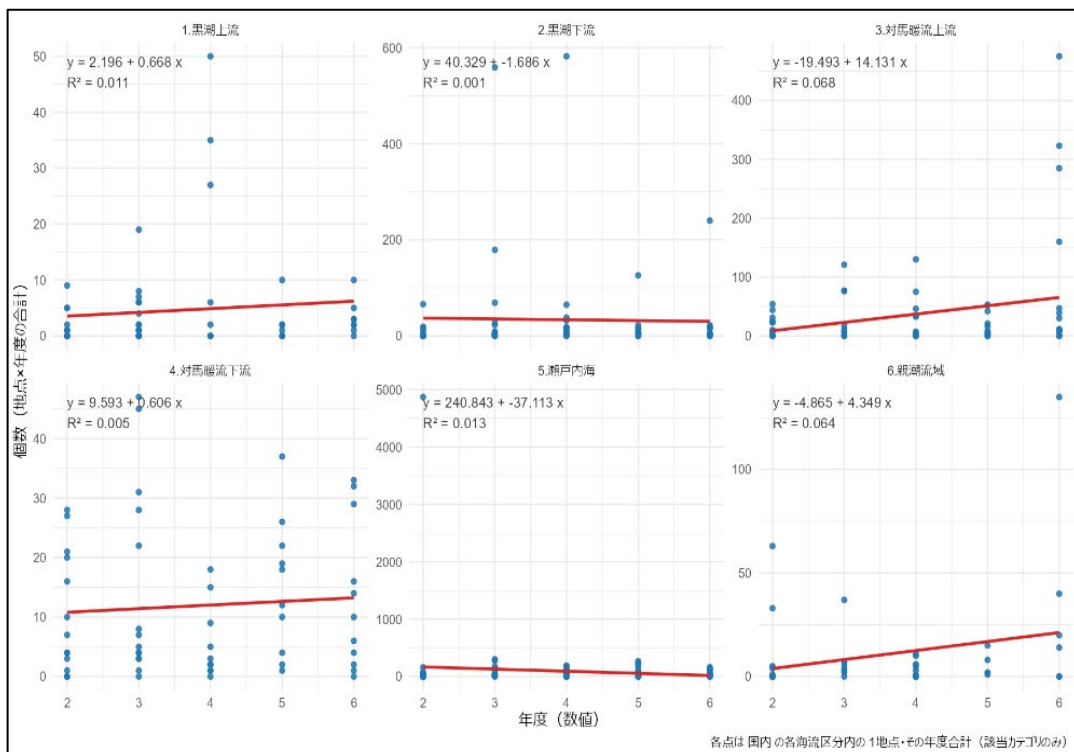
- 全国で回収される各品目のうち、毎年約1/4～半数程度は言語表記が不明であった。
- とくに漁業用の浮子については、日本語表記製品はどの年もほとんど回収されなかった。



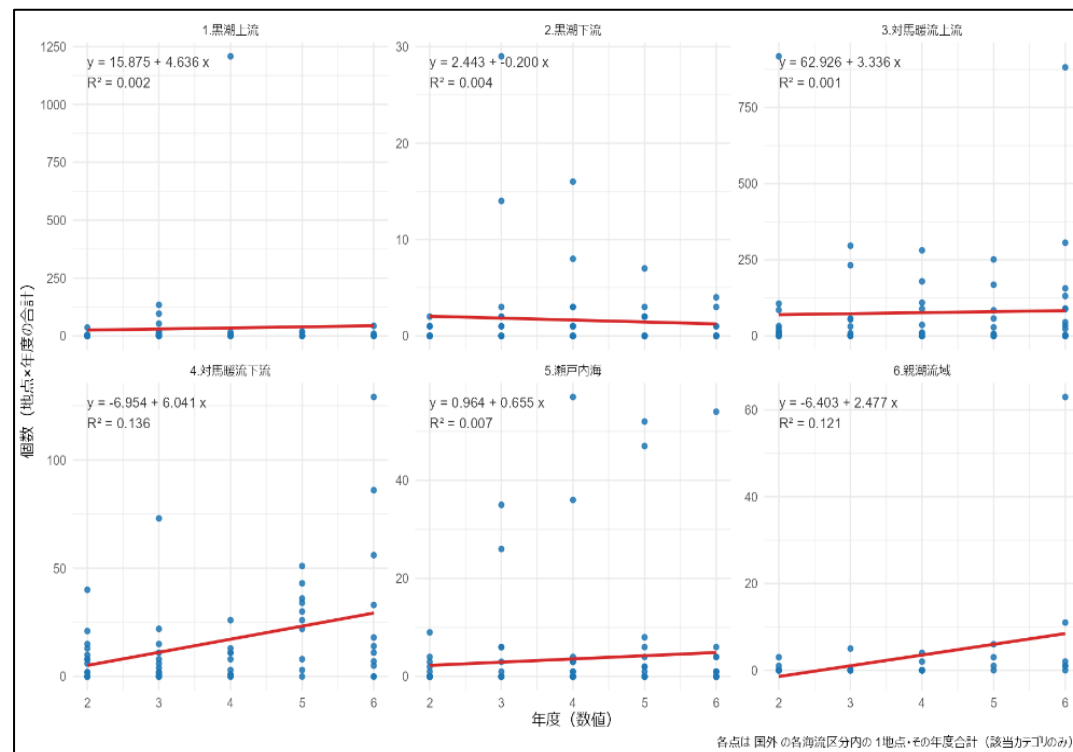
※1年度当たりの回収個数の全国合計を示す

## ペットボトルキャップ

### 日本語表記個数



### 外国語表記個数

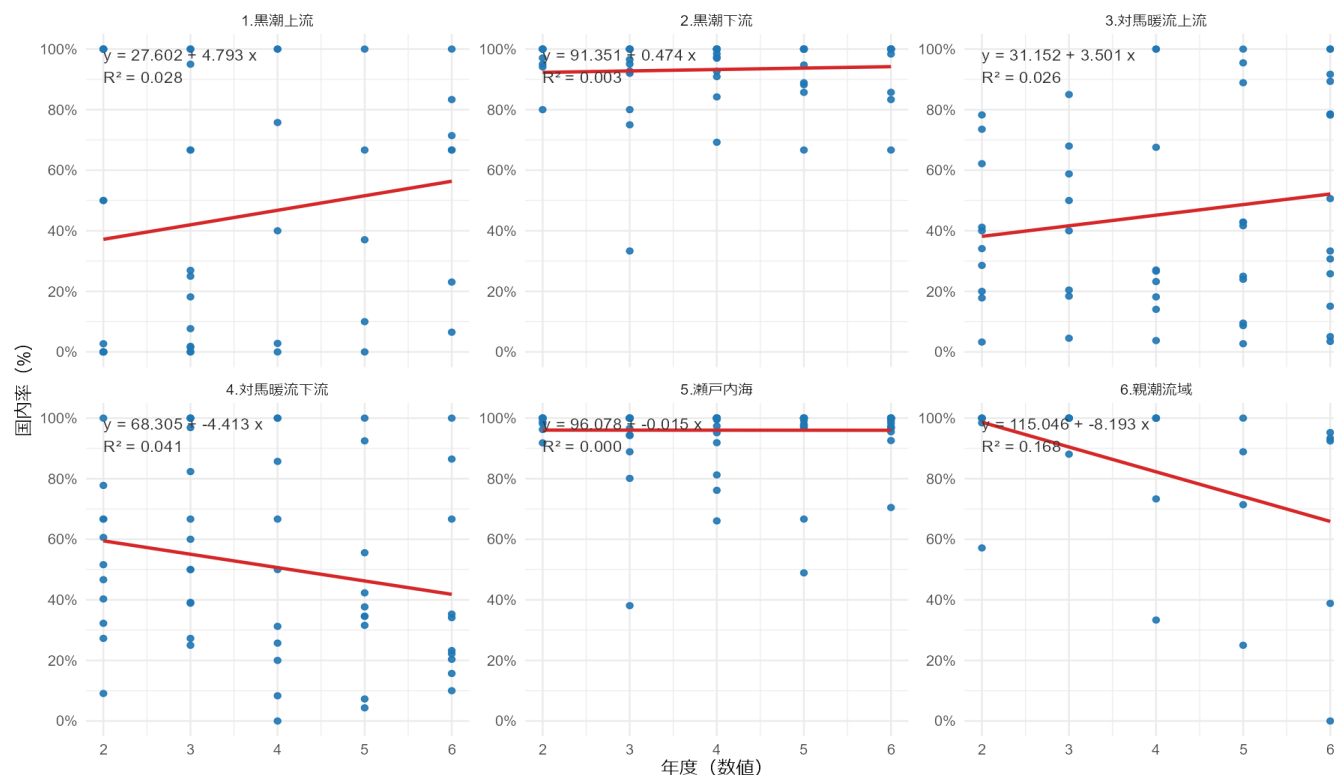


※1点は1地点・1調査における回収個数を示す  
 ※年度により調査地点は異なる

- 黒潮下流では、日本語表記個数、外国語表記個数の両方が減少傾向であった。
- また、瀬戸内海では日本語表記個数は減少、外国語表記個数が増加傾向と、国内・国外で逆の傾向が確認された。
- その他の地域では、日本語表記・外国語表記共に増加傾向が確認された。
- ただし、上記のいずれも統計的な有意性は無し。

## ペットボトルキャップ

### 日本語表記割合



※1点は1地点・1調査における回収個数の割合を示す(言語不明は除く)

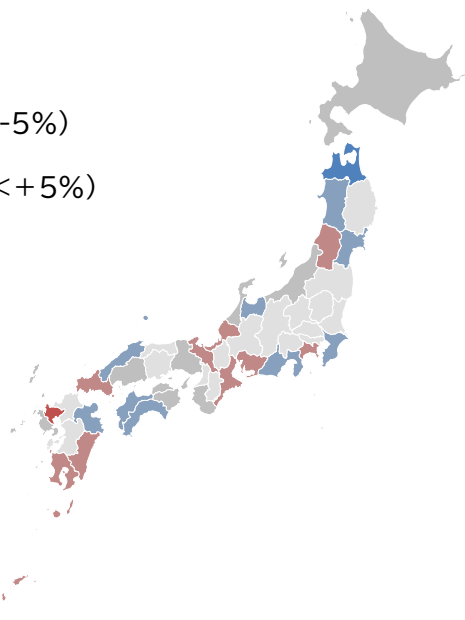
※年度により調査地点は異なる

- 黒潮上流、対馬暖流上流では、日本語表記の割合が増加傾向していた(なお、前ページにおいて、絶対量も増加していることが確認された)。
- 対馬暖流下流、親潮流域では日本語表記の割合が減少傾向(なお、前ページにおいて、絶対量は増加していることが確認された)。
- なお、上記のいずれも、統計的な有意性は無し。

## ペットボトルキャップ※継続調査地点のみ

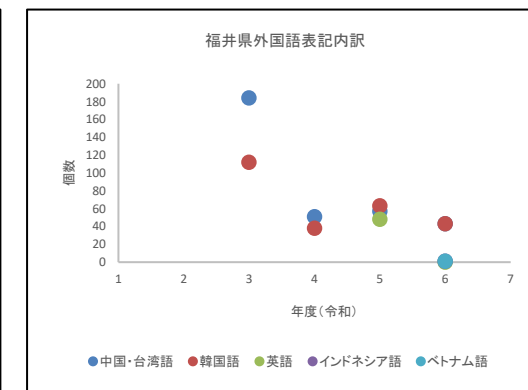
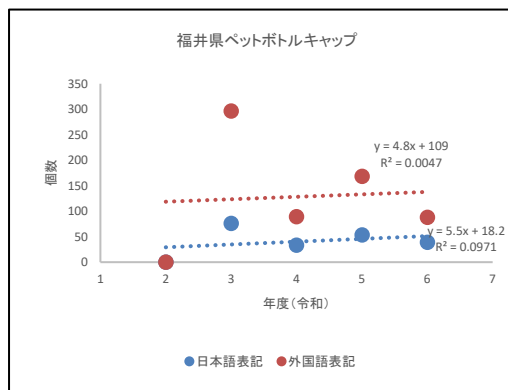
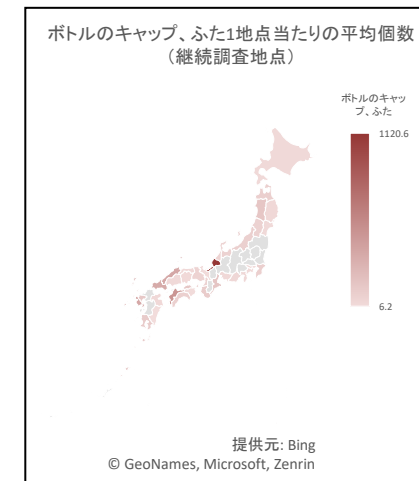
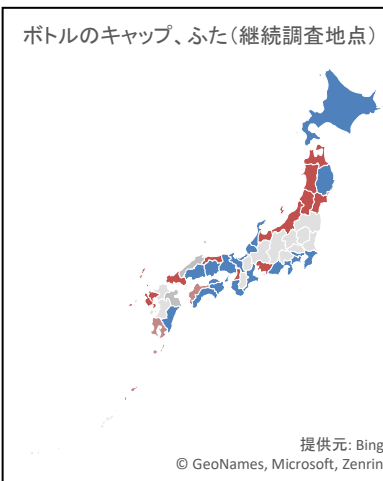
ペットボトルキャップの日本語表記割合の増減

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数割合」を散布図にし、その回帰直線の傾きを日本語表記割合の増減として示す。

提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

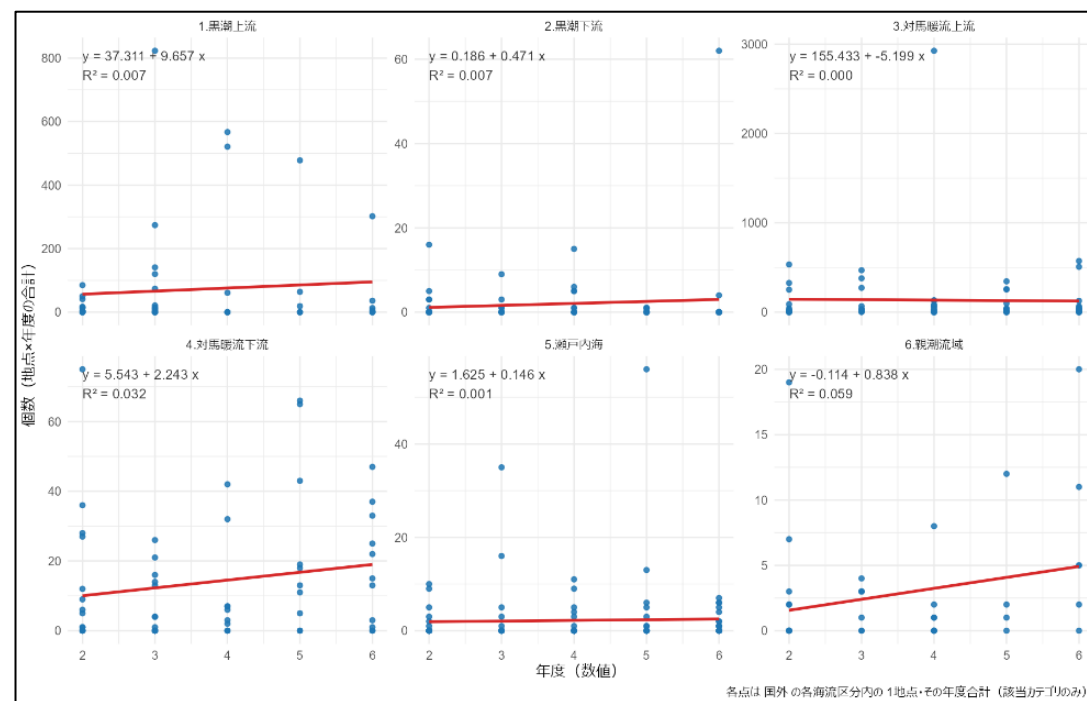
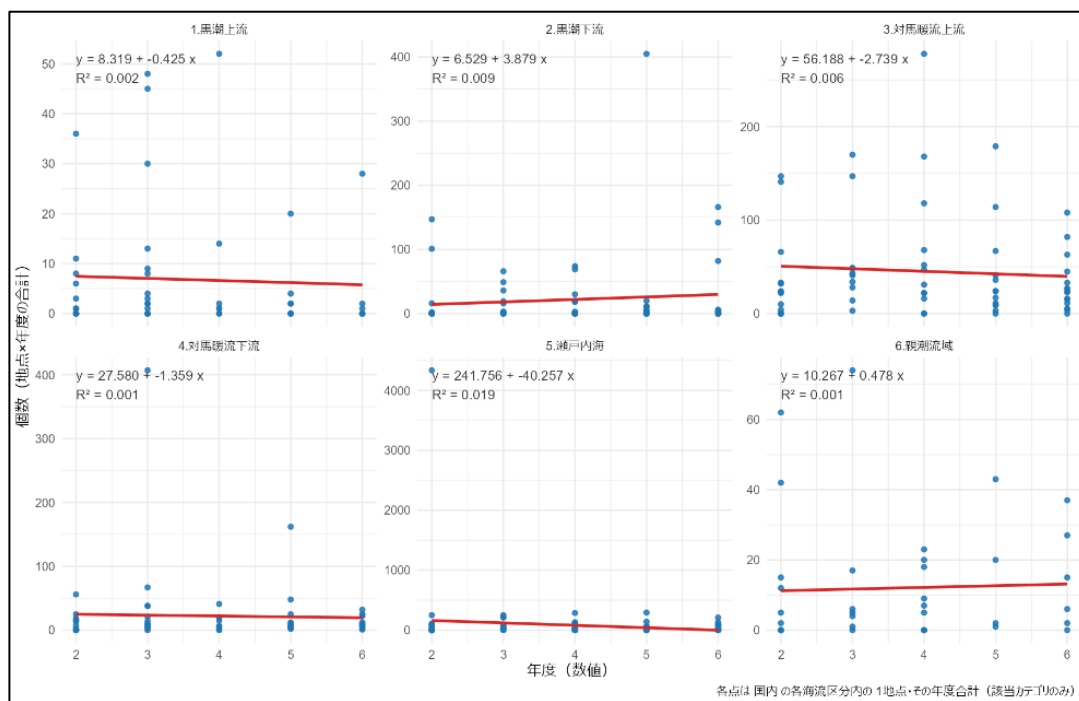


- 福井県では、ボトルのキャップ、ふた(ペットボトルキャップ及びその他のボトルのキャップや容器のふたを含む)の個数は減少傾向だが(中央上図)、左図により言語表記別の増減傾向を確認すると日本語表記のペットボトルキャップについてはやや増加傾向を示した。
- 一方で、絶対量では日本語表記、外国語表記共に増加傾向が見られており(中央下図)、R3はR2と比べ外国語表記、日本語表記共に増加している。外国語表記としては、中国・台湾語表記及び韓国語表記がR3年以降継続的に確認された他、年度により英語、インドネシア語、ベトナム語も確認された(右下図)。

## ペットボトル

### 日本語表記個数

### 外国語表記個数

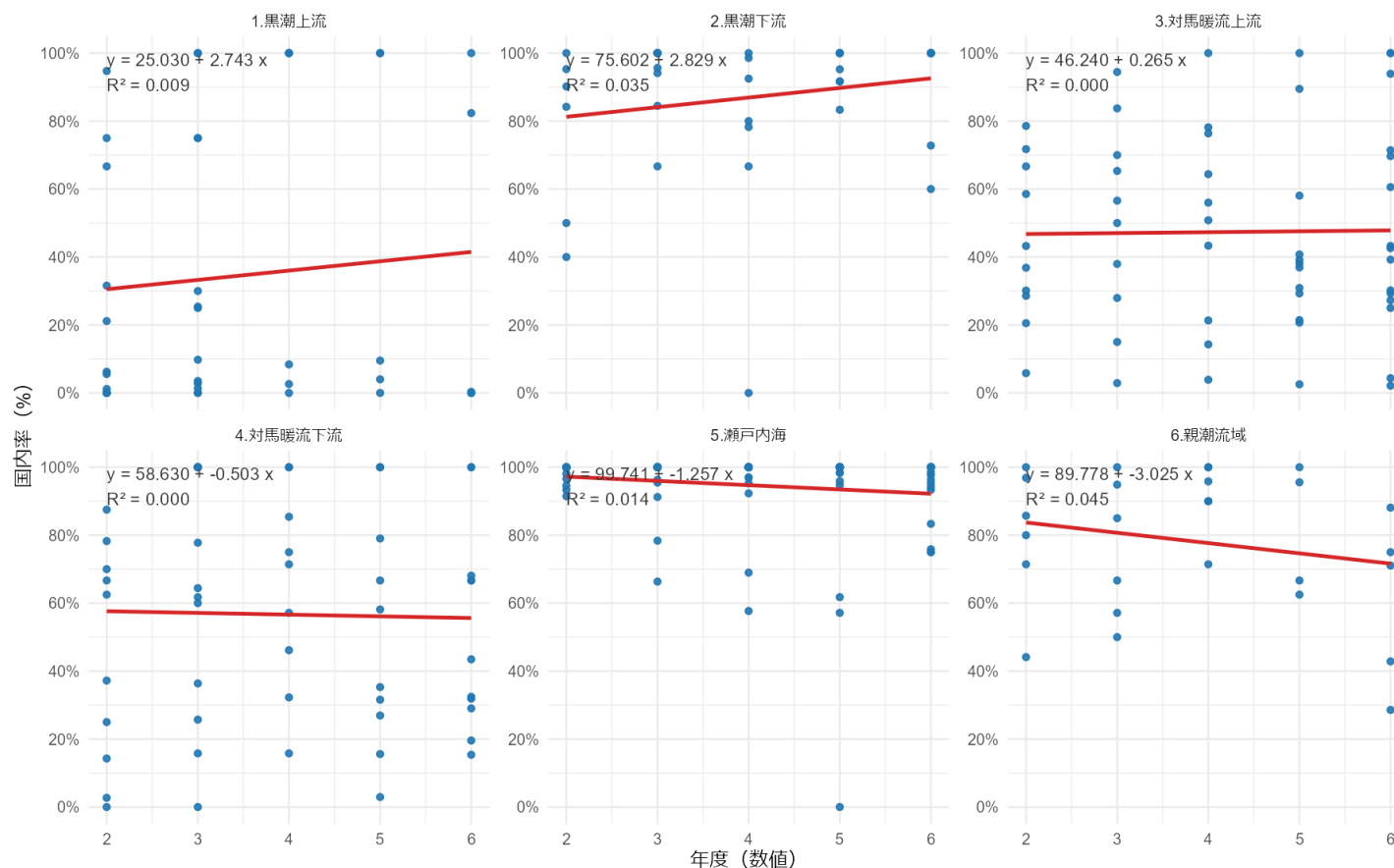


※1点は1地点・1調査における回収個数を示す  
 ※年度により調査地点は異なる

- 黒潮上流、対馬暖流下流、瀬戸内海では日本語表記は減少、外国語表記は増加傾向が確認された。
- 一方で、黒潮下流、親潮流域では日本語、外国語表記共に増加した。
- なお、いずれも統計的な有意性は無し。

## ペットボトル

### 日本語表記割合



※1点は1地点・1調査における回収個数の割合を示す(言語不明は除く)

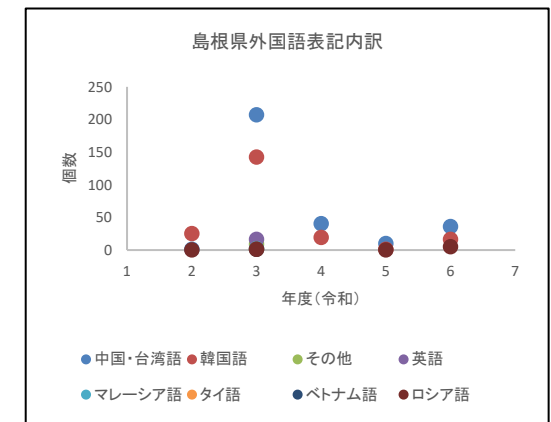
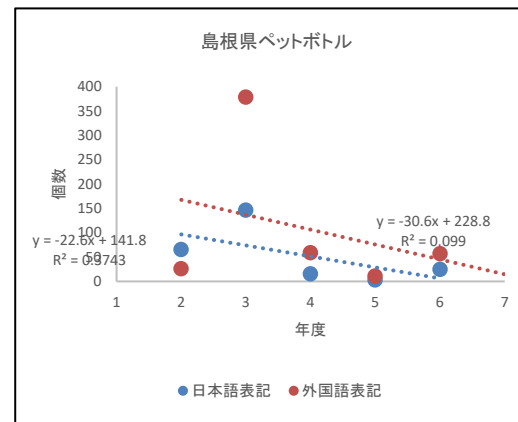
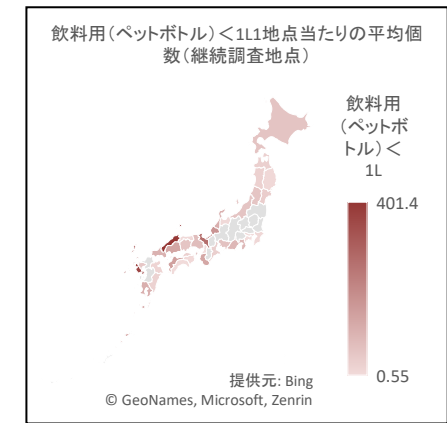
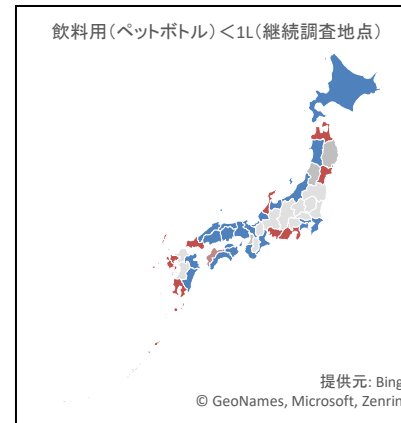
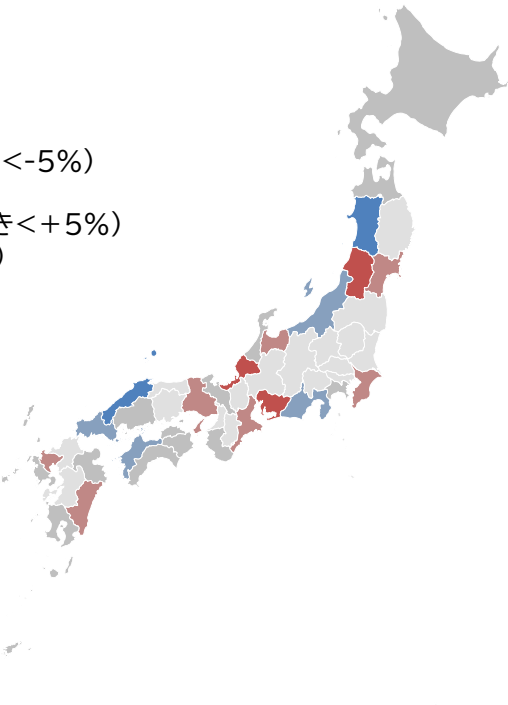
※年度により調査地点は異なる

- 黒潮上流、下流、対馬暖流上流では日本語表記の割合が増加した。なお、黒潮上流、対馬暖流上流では絶対量は減少していた(いずれも統計的な有意性無し)。
- 親潮流域では割合、絶対量共に外国語表記に増加傾向が確認された(いずれも統計的な有意性は無し)。

## ペットボトル※継続調査地点のみ

ペットボトル国内割合増減

- 減少(傾き-5%以上)
- やや減少(-1%≦傾き<-5%)
- 横ばい(傾き±1%)
- やや増加(+1%≦傾き<+5%)
- 増加(傾き+5%以上)



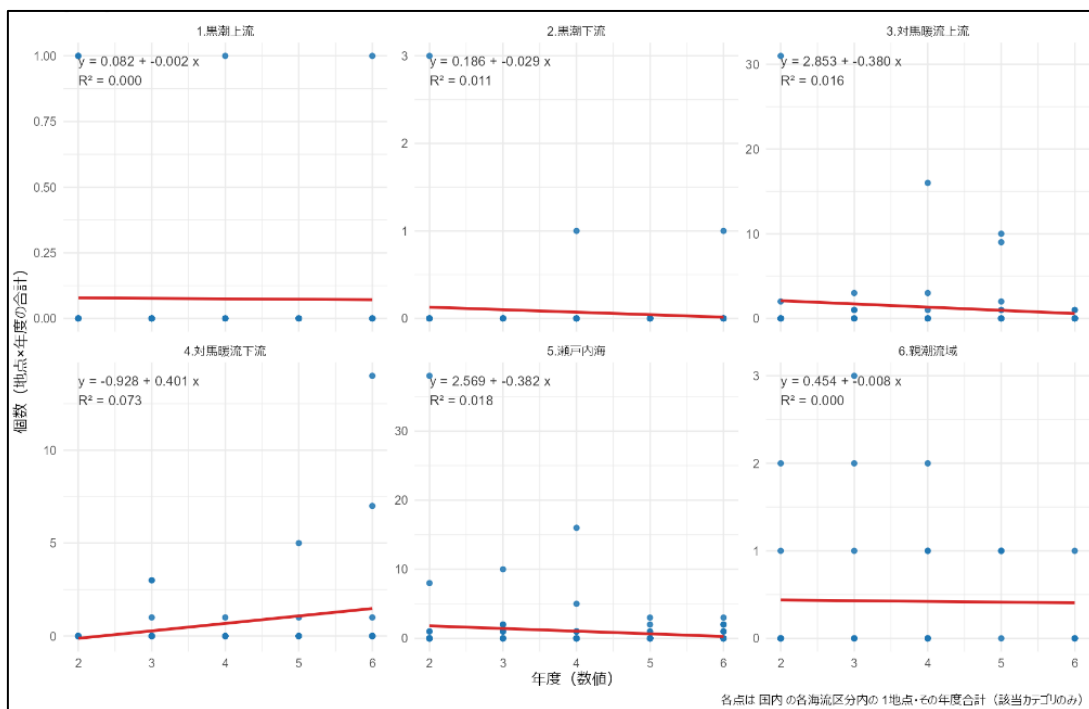
※各都道府県について、「1地点・1回の調査あたりの回収個数割合」を散布図にし、その回帰直線の傾きを日本語表記割合の増減として示す。

提供元: Bing  
© GeoNames, Microsoft, Zenrin

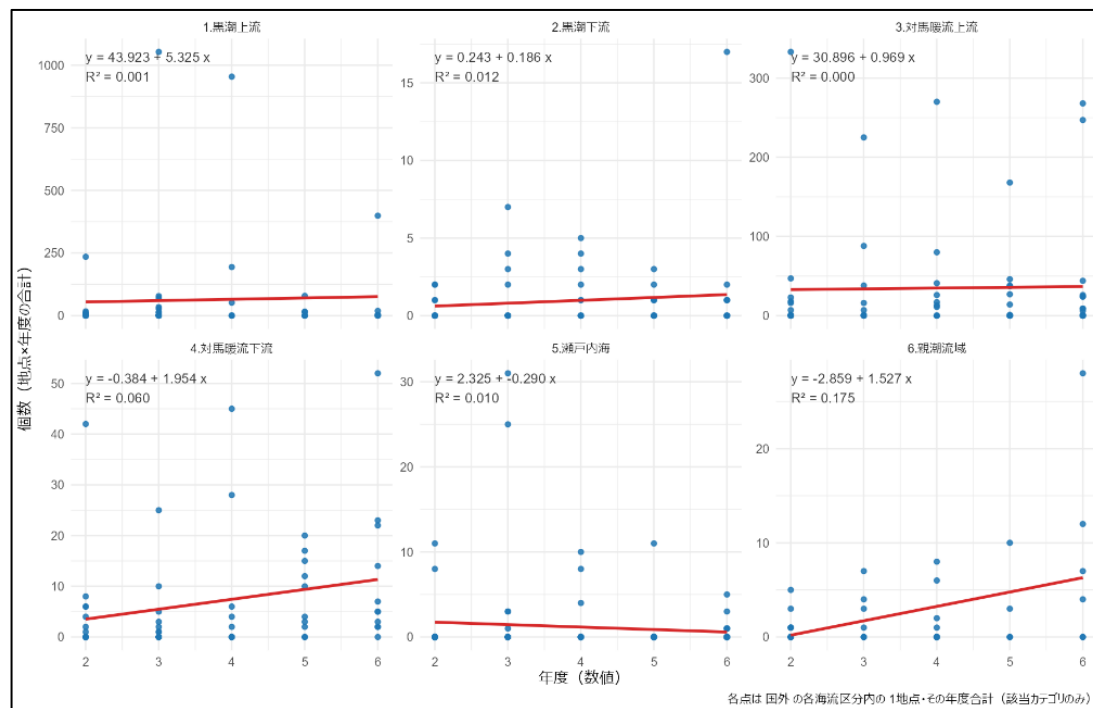
- 島根県では、飲料用ペットボトル<1Lの個数が全体的に減少傾向だったが(中央上図)、左図のとおり言語表記別に確認すると日本語表記の割合も減少傾向だった。
- また、島根県の日本語表記、外国語表記の個数を確認すると、どちらも減少傾向が見られた(中央下図)。外国語表記、日本語表記共に、R2からR3にかけて個数が増加しており、外国語表記については特に中国・台湾語および韓国語がR3に増加した(右下図)。
- なお、中国・台湾語表記及び韓国語表記以外の言語については、R3にのみ確認された。

## 漁業用の浮子

### 日本語表記個数



### 外国語表記個数

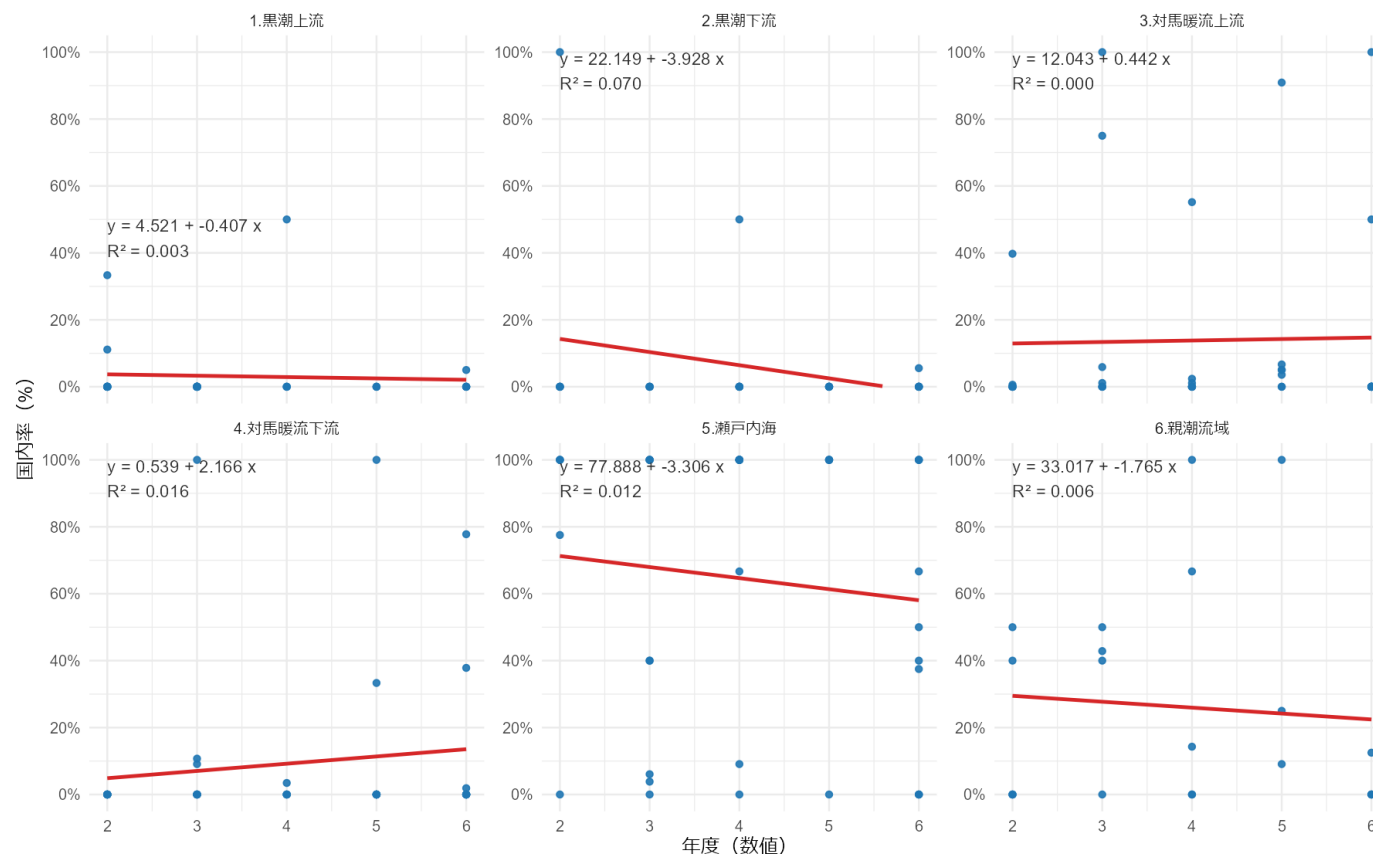


※1点は1地点・1調査における回収個数を示す  
 ※年度により調査地点は異なる

- 日本語表記の回収個数は多くの年度で10個以下であり、傾向の把握が困難であった。
- 外国語表記についても回収個数が少ない地点が多いものの、瀬戸内海以外の地域において増加傾向が共通していた（なお、いずれも統計的な有意性は無し）。

## 漁業用の浮子

### 日本語表記割合



※1点は1地点・1調査における回収個数の割合を示す(言語不明は除く)

※年度により調査地点は異なる

- 対馬暖流上流・下流では日本語表記の割合が増加していた。なお、対馬暖流上流では日本語の絶対量は減少傾向であった一方、対馬暖流下流では絶対量も増加傾向が確認されていた(いずれも統計的な有意性無し)。
- ただし、いずれの沿岸域区分においても、言語表記が判明している個数が少ないため、増減傾向の判断は困難である。

# 主な分析結果

- 5年間の全国ランキングでは、カキ養殖用まめ管、カキ養殖用パイプ、ボトルのキャップ、ふた、飲料用ペットボトル<1L、ロープ・ひも(漁具)の5つの品目が継続的に上位に位置していた
- 詳細な増減傾向の確認のため都道府県別や言語表記別の漂着量を確認したところ、対策の効果検証のためには引き続きモニタリングを要すると考えられた。また、海流が漂着量に大きな影響を与えていることが示唆された。

## 〈カキ養殖用まめ管・パイプ〉

- カキ養殖用まめ管は山口県、カキ養殖用パイプは愛媛県で最も多く、瀬戸内海に回収量が多い地点都道府県が集中している。
- 一方で、瀬戸内海域の都道府県の間でも増加・減少傾向にばらつきがあり、対策の効果検証のためには引き続きモニタリングしていく必要がある。

## 〈ボトルのキャップ、ふた〉

- 都道府県ごとの平均個数(継続調査地点のみ)は福井県が多く、R2と比べR3に急増するという特徴がみられた。
- ペットボトルのキャップの言語表記調査によると、日本語表記、外国語表記共にR3に増加しており、とくに中国・台湾語および韓国語表記が増加していた。
- 海流の影響等により、外国語表記の漂着が増える場合があると考えられる。

## 〈飲料用(ペットボトル)<1L〉

- 全国的に減少傾向の都道府県が多く、増加傾向の都道府県は10県のみだった。
- 都道府県ごとの平均個数(継続調査地点のみ)は島根県が多く、R2と比べR3に急増するという特徴がみられた。
- ペットボトルの言語表記調査によると、日本語表記、外国語表記共にR2からR3にかけて増加しており、外国語表記の中では特に中国・台湾語および韓国語が増加していた。また、その他の外国語表記はR3にのみ確認された。
- 海流の影響等により、外国語表記の漂着が増加する可能性があると考えられる。

## 〈ロープ、ひも〉

- 都道府県ごとの平均個数(継続調査地点のみ)は福井県が多く、ボトルのキャップ、ふたと同様にR3に急増していた。
- ボトルのキャップ、ふたと同様に、海流等の影響によりR3の漂着量が増加したと考えられる。